

# 占領期写真の複合的活用に関する試み

——一九四五年東京・銀座のケーススタディ——

佐藤 洋一・衣川 太一

はじめに

国内に記録が少ないとされる占領期の写真は貴重な史料であり、昭和館をはじめとする博物館施設、大学などの機関、研究者組織、あるいは個人レベルの研究者など、様々な主体が占領期の写真収集を進めてきた。収集された写真は様々な形で活用されているが、多くの場合、個別的な主体によって撮影された写真を対象にする作業にとどまっている。そもそも都市空間で撮影された写真史料から読み取れる情報は、写された時空間の情報や撮影者の行為に関わる情報など複合的なものである。複数のソースからの写真を組み合わせることで、多角的かつ立体的に空間状況や撮影者の行為をトレースできるのではないだろうか。

本稿は、東京・銀座で終戦後の一九四五（昭和二十）年の間に撮影された写真を主な対象として、複数のソースからの写真を組み合わせ、空間状況を考察する手がかりを探ることを試みる。銀座は、占領期の日本の市街地の中でも、最も多くの人々によって撮影されたエリアの一つである。写真の数も比較的多く、今回の作業の目的に添う対象である。

## 一 研究の背景

(一) 占領期写真史料の収集と公開の経過<sup>1</sup>

一九六〇年代末以降、主に米国所蔵の史料調査の一環で、米軍などによる公的写真の収集も行われてきた。東京に関していえば、終戦直後、特に空襲被害について米国に所在する写真史料での紹介がなされ始めたのは一九七〇年代に入ってからである<sup>2</sup>。史料の出所は、米国立公文書館（NARA）、国防総省、マッカーサー記念館などであった。紹介されたものは主にオフィシャル写真<sup>3</sup>であり、陸軍通信隊写真（Signal Photo）を主体に、空襲関係では空軍、空襲被害等に関しては戦略爆撃調査団の史料群であった。NARA所蔵の写真は、パブリックドメインで利用の際の細かい制限がほとんどないこともあり、現在に至るまで、メディアや研究者の手によって自由に扱われ、紹介されてきた<sup>4</sup>。また沖縄県公文書館による「写真が語る沖縄」は、NARA所蔵の写真史料を収集し、ウェブ上で公開しているものとして知られている。

一方、米国に所在するパーソナルな写真も八〇年代より紹介されてき

た。<sup>⑤</sup>当初は政府関係者やマスコミ関係者のチャンネル経由で、日本の様々な史料館やマスコミなどに伝えられた。九〇年代以降、米国各地の史料館に所蔵されているパーソナルなコレクションが知られるようになり、写真集の出版という形で国内へと還元した。二〇〇〇年代に入ると、所蔵史料のデジタル化により、コレクションにアクセスできるチャンネルが広がった。そのような状況変化の中、東京の昭和館は開館に先立つ九〇年代から、パーソナルな写真コレクションを複製する形で収集を続けている。<sup>⑥</sup>

さらに“AP”“LIFE”などのプレス写真も一部はデジタルアーカイブとしてウェブ上で公開されており、課金制で利用可能になっている。<sup>⑦</sup>またすでに廃刊になった新聞社のストックフォトに関しては、コレクションが図書館に移管され公開されている例もある。<sup>⑧</sup>

このように写真史料は徐々にデジタル化やインターネット環境下に置かれ始め、収集や公開が促進され、パーソナル写真など写真史料の領域が広がってきている。パブリック、パーソナル、プレスという三区分からこれまでの経過を概観する。図1にその概略をまとめた。

### ① オフィシャル写真

オフィシャル写真を公的な機関が扱う場合は、地域史系の出版物の中で使われる出版型、さらに公文書館等でデータを提供したり、閲覧に供するサービス型がある。研究者・コミュニティが主体の場合は、収集し研究ツールとしてクローズドで写真が使われている例が多いと思われるが、それをオープンアクセス化した「日本空襲デジタルアーカイブ」<sup>⑨</sup>の例もある。また研究の成果を書籍として出版する例は多いが、研究者の

主体	素材区分	オフィシャル写真	パーソナル写真	プレス写真
公的機関	出版型	『占領下の横須賀』(2005) 『台東原風景』(2015) 他多数	現物を寄贈され、公開 モージャー(国会図書館)、フェーレイス、デリーナ(江戸東京博)、リチャード・コサキ(JICA図書館) 他	展示物 博物館等の展示の一部
	サービス型	画像データの提供 「写真が語る沖繩」 (沖縄県立公文書館・website) 画像データの閲覧 「映像・音響資料」の一部 (昭和館・館内閲覧)	複製を公開 D.ボリア、カルメン・ジョンソン、オリヴァー・オースティン、ウィリアム・ヘリントンほか(昭和館) ルジュエリ(横浜開港資料館) 他	
研究者・コミュニティ	ツール型	研究組織によるwebでの提供 「日本空襲デジタルアーカイブズ」 (C.Karacas ほか 2010-)	研究組織内部での共有データ オースティン研究会、北沢川文化遺産保存の会、NPO石巻アーカイブ、京都カラー写真を考える会 など	
	出版型	『図説・占領下の東京』(2006) 『写真が語る日本空襲』(2008) 『米軍の写真偵察と日本空襲』(2011) 『米軍が見た1945年秋東京』(2015) 他	『下北沢の戦後アルバム』(2018) 『よみがえる1951』(2019)	
出版社等 営利団体		『東京占領』(1979)『東京大空襲の記録』(1982)『1945・昭和20年米軍に撮影された日本』(2015) 『写真でわかる事典日本占領史』(2019)	『マッカーサーの見た焼跡』(1983)『トランクの中の日本』(1995)『マッカーサーの日本 1945-1951 カール・マイダンス写真集』(1995)『「にっぽん60年前」カラーでよみがえる愛蔵版ステイプルコレクション』(2005) 『日本の敗戦：キャバ、スミス、スウォープ、三木淳の写真』(2005)『戦後日本の復興の記録』(上・下：2018)	サービス型 有料のストックフォトサービス

文献 横須賀市編『占領下の横須賀』2005、台東区教育委員会生涯学習課『台東原風景』2015、佐藤洋一『図説・占領下の東京』河出書房新社 2006、工藤洋三、奥住喜重 編著『写真が語る日本空襲』現代史料出版 2008、工藤洋三『米軍の写真偵察と日本空襲』2011、佐藤洋一『米軍が見た1945年秋東京』洋泉社 2015、『東京占領』月刊沖縄社 1979、東京空襲を記録する会編『東京大空襲の記録』三省堂 1982、『1945・昭和20年米軍に撮影された日本』日本地図センター 2015、平塚征緒『写真でわかる事典 日本占領史』PHPエディタース・グループ 2019、『下北沢の戦後アルバム：焼け遣ったまち』北沢川文化遺産保存の会 2018、アラン・バトラー『よみがえる1951』三陸河北新社 2019、ジェターノ・フェーレイス『マッカーサーの見た焼跡』文藝春秋 1983、ジョー・オダネル『トランクの中の日本』小学館 1995、シェリー・スミス・マイダンス『マッカーサーの日本 1945-1951 カール・マイダンス写真集』講談社 1995、『「にっぽん60年前」カラーでよみがえる愛蔵版ステイプルコレクション』毎日新聞社 2005、『日本の敗戦：キャバ、スミス、スウォープ、三木淳の写真』清里フォトアートミュージアム 2005、ディミトリー・ボリア『戦後日本の復興の記録(上・下)』大学教育出版 2018  
website「写真が語る沖繩」：<http://www2.archives.pref.okinawa.jp/opa/searchpics.aspx> 「日本空襲デジタルアーカイブズ」：[https://www.japanairraids.org/?page\\_id=671](https://www.japanairraids.org/?page_id=671)

図1 米国に所在する戦後日本写真の日本への還元パターン

みならず、出版社等の営利団体も関わっているため、ここで新たに著作権問題が生じている。

### ② パーソナル写真

パーソナル写真の場合は、公的な機関が収集公開しているパターン（サービス型）、研究者・コミュニティが収集し研究ツールとして利用しているパターン（ツール型）、研究者および出版社等が出版物等を通じて紹介しているパターン（出版型）があるが、公的な機関が所有者から現物の寄贈を受けてコレクションを公開しているパターンもあり、ウェブ上にてデジタルデータが公開されている例も多い。研究者・コミュニティによるツール型の中には、地域に根ざして、当該地域のコミュニティが写真コレクションの解説と紹介を綿密に分析し、展示や出版へと進める「北沢川文化遺産保存の会」<sup>10</sup>、「石巻アーカイブ」<sup>11</sup>、「オースティン研究会」<sup>12</sup>などの例もある。

### ③ プレス写真

プレス写真は、写真イメージ自体が商品となつているため、利用の自由度は低く、その多くは公的施設で展示等に使われる、出版物等を通じて紹介されているパターンである。

### (二) オフィシャル写真のヴァナキュラー化

占領期の写真史料の扱われ方は、特異な面を含んでいたと思われる。それは一言で言えば「オフィシャル写真のヴァナキュラー化」である。

九〇年代までに書籍を通じて紹介されてきた占領期写真の多くは、米

国国立公文書館などの公的機関に所蔵されたオフィシャル写真であった。写真が紹介される場合、それらの史料的情報は捨象され、イメージだけが紹介されているものが少なくない<sup>13</sup>。具体的に言えば、個々の写真にはそれぞれの所蔵機関、コレクション名、レファレンスする際のID番号があるはずだが、これらが示されることはほとんどなかった。もちろん写真の所蔵機関は示されるが、個々の写真との対応関係が示されないことが多く、一冊の本に収録された写真の所蔵場所が複数にわたる場合、当該写真の所蔵機関が基本的にわからないのである。これでは後続の研究者が調査を行おうとする時に困難に直面する。

史料ソースに関する情報を軽視する傾向はなぜ存在していたのか。現在に比べてアカデミックなリテラシーが成熟していなかったことはあるにせよ、根本的には、占領期の写真記録が日本国内にないという共通認識の下で醸成されたのではないだろうか。読者もこの時期のイメージが提示されることを「ありがたく」受け取り、製作者サイドもそのことを知った上で、メディアコミュニケーションが成立し得たのである。

言い方を換えれば、撮影者の存在（どのような経緯で写真が撮られたのか）や、史料的な経緯（その写真がどのように扱われて、目の前にあるのか）に対する疑問を持たずにいられたということにほかならない。ちなみに、このように指摘するのは、筆者自身がそのような態度で写真を見ていたという記憶があるからである。しかし時間が経過し当事者も減少していく状況では戦争や占領に関わるイメージは、より客観的に提示することが求められるのではないだろうか。

さらに言えば、こうした取り扱われ方をされた写真の多くは、米国のオフィシャル写真であり、パブリックドメインとして提供されてきたこ



とがもたらした側面もあるだろう。米軍のオフィシャル写真は使用に供する構えが寛容であり、当たり前のようにそこに存在し、非常に容易く利用することができるからである。その結果、イメージは様々な場所へと伝播し、使う際の抵抗感のなさ、写真がもたらされた経緯に対する考慮のなさがオフィシャル写真のヴァナキュラー化を促してきたと言える<sup>14</sup>。

こうした現象は日本のみならず、米国でも存在していることは想像に難くない。実際筆者は米国内にある様々な個人コレクションを調査するうち、それらの写真の中にオフィシャル写真が入り込んでいることを度々確認した。これもまさにオフィシャル写真のヴァナキュラー化という生態である。

オフィシャル写真を使う際には、「使いやすいイメージ」として安易に使うことは、こうした傾向を助長していくため、写真史料のレファレンシャル情報を示すことが最低限必要だろう。

近年新たな取り組みとして、モノクロ写真のAI自動色付けは、占領期の写真を対象としているものも多い<sup>15</sup>。この手法は、端的に言えば史料イメージを用いた二次創作である。そもそもその史料性を考えれば、このような操作には、相当の留保が必要であることは確認しておきたい。筆者の立場は、史料としての写真を捉え直し、その読み方を発展させることで多くの情報を取り出そうとするものである。写真の色付けを考える以前に取り出せる情報は十分にあると認識している。さらにカラー写真は、占領期には数多く撮られているため、モノクロ写真に色を付ける前に、まずはカラー写真を収集すること、それを数多く見せることにリソースを割くべきである。色付けという二次創作の意義があるとすれば、元の史料の存在を知らしめるためであり、オリジナルな史料ソースとの

リンクが切れてしまつては本末転倒で、史料に対する態度は七〇年代とは変わらないのである。

以上のような経緯を踏まえ、本稿は、写真史料の複合的な利用を通じ、史料としての写真の意味をより多く引き出すための方法を考える試みである。写真を都市空間史料として複合的に検討しながら、東京・銀座にて一九四五年の終戦後から概ね年内までに撮影された写真を対象とし、その活用の一例を提示することを目的とする。

## 二 写真の複合的活用に関するモデル

複合的な活用とは、写真を複合的な情報を持つ史料として捉えることを基礎に、複数の撮影者による写真コレクションを組み合わせながら、そこから導き出される事実や認識を指摘し、共有していくことである。

### (一) 写真史料をどう捉えるか

写真とは二次元的な存在であるが、オブジェクトとしての写真が含む情報は多層的である。筆者の考えでは、写真は以下の四つの情報レイヤーを含んでいる(図2)。

- ① 時空間記録・写真は「その時」の「この場所」を記録したものである。
- ② 行為記録・写真は撮影者が撮影したという行為を記録したものである。
- ③ メディア記録・写真は製品としてのメディアに記録されている。
- ④ 経緯記録・写真は撮影されてから現在までの経緯も記録しうる。

通常、我々は写真の、フレーム内に写されたもののみを注目している

が（時空間記録）、写真は撮影されたという事実を含むものであり（行為記録）、また撮影されたメディアやフォーマットはその写真の撮影の背景や目的・意図を伝え、また社会性をも伝える（メディア記録）。さらには、撮影されてからどのように扱われてきたのかは、その写真イメージをめぐる所有と価値認識の実情を伝えてくれる（経緯記録）。

写真の複合的な活用のベースとなるのはこうした多層的な捉え方である。

（二）複数のイメージを組み合わせる事

複数のイメージによってできることは、比較、結合・拡張といったことである。

写真に含まれる情報レイヤーのどの部分に着目するのかで複合化のあり方が変わってくる。同一あるいは同種の対象を撮る場合（what）、フレミングの方法や撮影行為あるいは撮影メディアフォーマットが同一であること（how）、撮影場所が同一エリアである場合（where）などが挙げられる。以下詳述してみる。

① What—何を撮るか—同一あるいは同種の被写体を撮っている写真群

占領期の米国人の写真を調査していると、全く同一の被写体を撮っている写真に多く出会う。例えば建造物の場合、鎌倉・長谷の大仏、東京・有楽町の日本劇場、日光東照宮の陽明門などといった観光地における中心的な鑑賞対象が挙げられる。ここからは米国人たちの観光行動を推測し、ある程度理解することが可能になる。

また同種の被写体もよく確認できる。路上でよく見かけるものとして、牛がひくハニーバケット、紙芝居屋、弟妹をおんぶする子供などもよく

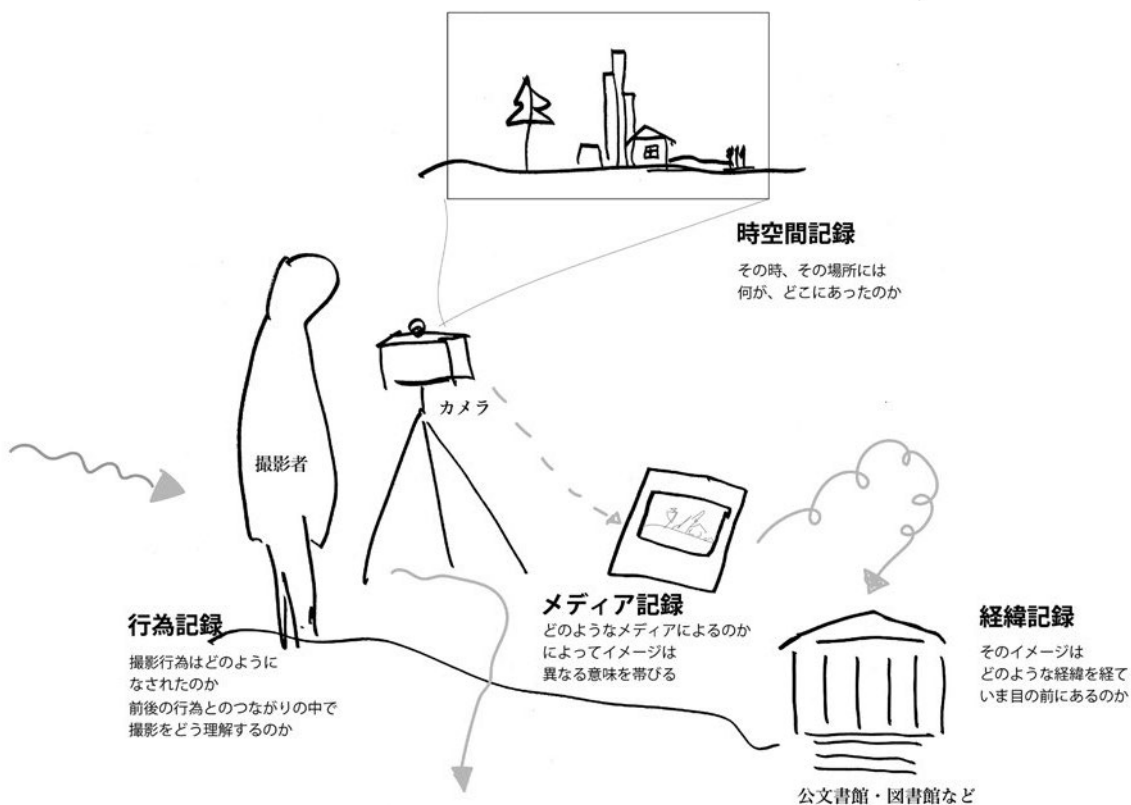


図2 史料としての写真に含まれる4つの情報レイヤー

撮られる対象である。何が米国人たちの目を引いたのかが推測できる。また同種の被写体を撮った複数の写真を比較すれば、次に挙げるHow(どのように撮っているのか)をより正確に理解することが可能になる。

②How(どう撮っているのか)↓同じ撮影手法・機材・メディアを使っていること

撮影手法とは、列車からの移動撮影、高所からのパノラマ撮影、空撮、夜間撮影といったものである。手法自体に焦点を合わせると、撮影者のあり方、被写体との距離といった点での比較が可能になる。機材とは、主にカメラの種類であり、それはフィルムフォーマット、フィルム種類、フィルムサイズなどのメディアのタイプの問題でもある。例えば同一機材・同一メディアによる撮影に着目すると、撮影行為自体の傾向を掴むことができる。

③Where(どこ)で撮っているのか↓同じ場所、同じ町で撮っていること  
同じ場所での撮影行為は、撮影という行為の傾向と撮影を行っていたあるまとまりのある空間(例えば町)のあり方を把握できる。と同時に、①で挙げた同一の被写体を撮っていること、そして写真を組み合わせることで、場所の状況、空間の変化を復元的に考えることができる。本稿ではこのうち、whereに焦点を当て、銀座で撮られたストリートスナップを主な対象として、以下の三点の作業を進める。

- a. 写真の収集
- b. 当該写真の撮影地点の検証、確定

c. 地図を媒介にした情報の総合

これらを通じ、一九四五年の銀座における都市空間の具体的状況を検討する。特にa.に関しては銀座で撮られたと思われる写真を広く検討することとし、b.は銀座全域のうち今回は東側を昭和通りで区切られたエリアまでを対象とする。c.に関しては、特に空襲の被害が大きかった銀座一丁目〜六丁目を対象とする(図3)。

### 三 一九四五年の銀座

滅失した都市空間で撮られた写真をどう読み取ればいいのかだろうか。一見何もないと思われる写真から何を読み取れるのだろうか。焼け跡の空間的な広がりや距離感今日の眼では認識し難いことが多い。以下、写真の解説に先立ち戦時期、戦後期の銀座の都市空間の変化を概観しておきたい。

本稿で対象とするエリアは当時堀で囲まれていた銀座地域である。三十間堀川、外濠川、汐留川、京橋川に東西南北を区切られていた(図3)。以下、概ね時系列的に戦時下の状況、空襲、終戦後に分けて、都市空間における諸要素の変化を整理しておきたい。当時の状況を知るための史料としては、朝日新聞の記事を活用する。

#### (一) 戦時下の状況

##### ① 防火用水・防空壕

戦時下、防火用水や防空壕などの防空対策は各家庭でなされたが、の

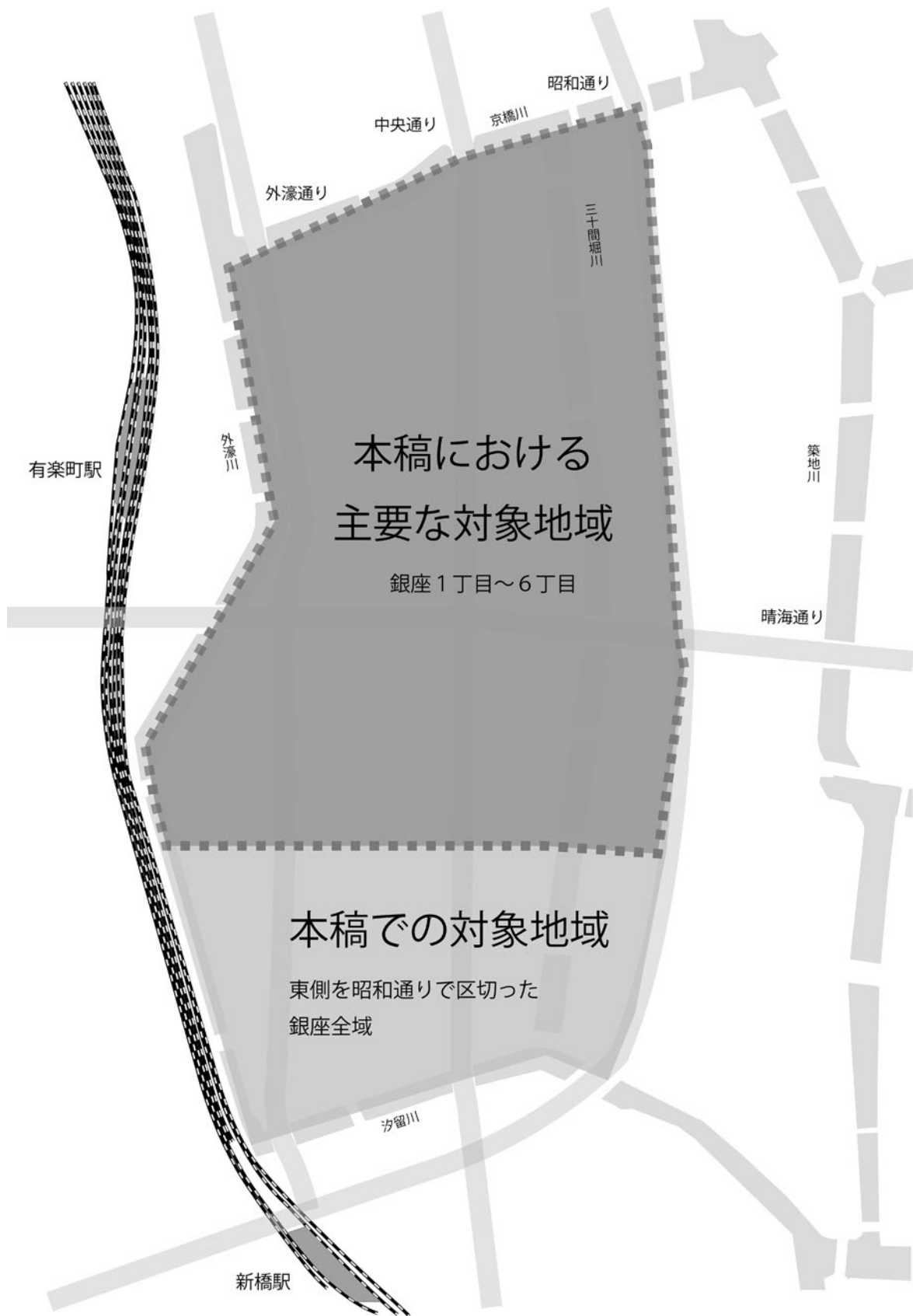


図3 研究対象地域



みならず、例えば銀座通り、晴海通りの歩道には公共待避所として防空壕が掘られた。尾張町（現・銀座四丁目交差点）付近にあった公共待避壕については、雨によつて盛り土が崩れ、壕の中に入り込んでとても中に入る足場がない、と紹介している新聞記事がある。<sup>16</sup>これらは終戦後に埋め戻された。

空襲が激化していた一九四五（昭和二十）年三月に、東京都は「安全な地下生活」を送るための地下または半地下住居としての壕舎を、さしあたり一町会一個程度作ることを奨励している。<sup>17</sup>

また、橋の欄干等は一九四二（昭和十七）年五月の金属類回収令で供出され、撤去されていたことも知られる。

## ② 建物疎開と疎開空地

防空措置として、市街地の建物を取り壊して空地を作る建物疎開は、一九四三（昭和十八）年十一月に「帝都重要地帯疎開計画」として東京都が発表し、建物除去によつて市街地内の防火帯や工場付近、主要駅付近に空地を作るものであった。この建物疎開は、一九四四（昭和十九）年四月に発表された第三次建物疎開から、さらに大規模化していく。この建物疎開は、先の「帝都重要地帯疎開計画」を受けて帯状に広域的な空地を作る疎開空地帯、重要施設疎開空地、線路沿いや駅周辺に空地を作る交通疎開空地に加え、市街地内部に点的な空地を作る疎開小空地のように分類されていた。中央区立京橋図書館には当時の京橋区における疎開区域を示す図が残されており、一九四四年五月の第四次指定までの区域が印刷された地図の上に、その後追加指定された区域が通し番号とともに手描きで書き込まれている。それによれば銀座では疎開空地と

して三十箇所以上ナンバリングされているが、第四次疎開として対象となったのは、三十間堀沿いの銀座三丁目四〇坪、銀座六丁目六〇坪、泰明小学校隣の銀座西五丁目一七〇坪の三箇所を過ぎない。これ以降第六次まで建物疎開指定の中で、多くの区域が追加されていった。この地図に手描きで書き込まれているのは五次と六次の指定である。この地図から区域の比較的详细な情報を得ることはできるが、疎開指定と実際の建物取り壊しがいつ、どのような形で行われたのかについての正確な記録は現時点では見つけられていない。

銀座二丁目にあった米田屋洋服店関係者であった柴田の手記には見聞きした建物疎開のことが書かれているが、それによると「（米田屋ビルの）隣家の中華第一楼の建物が強制疎開で取り壊されるのを見ている」（四月十九日）とあり、四月にも建物疎開が行われていたことがわかる。つまり建物疎開が随時行われ、東京への本格的な空襲が始まった一九四五年に入つてからも断続的に行われたことの裏付けとなるだろう。

終戦の時点では第六次の建物疎開が継続中であり、終戦の十五日に住宅取り壊しは中止された。<sup>21</sup>さらに十八日には建物疎開により移転したもので元の場合に復帰したい人は復帰できること、その際の補償や買い戻し金額、あるいは取り壊しに着手していたものの扱いについて報じている。<sup>22</sup>

## ③ 疎開空地・戦災跡地の活用策

都は疎開空地を耕作地として活用することを奨励しており、一九四四年七月の新聞にも建物疎開跡を農園にする際の具体的な手続き等を報じている。<sup>23</sup>四五年三月二十八日には戦災跡地と疎開空地をできるだけ早く



農耕地化することを打ち出している<sup>24</sup>。新聞は焼け跡での南瓜作り<sup>25</sup>、また前年の記事では疎開空地で町会が家鴨を飼育している事例を写真付きで紹介している<sup>26</sup>（「銀座の家鴨」〔図4〕）。しかし実際のところは、疎開空地はまだしも、焼け跡を菜園化することはそれほど容易いことではなかったようである。新聞記事には「菜園化は難事」という銀座西五丁目の住人の話も紹介されており、「煉瓦屑、金属屑、石ころなどが非常に多くて大へんである、結局大きな穴をつくってそこに瓦礫類を埋め、掘り出した新土を上にはらまいて畑をつくるわけだが労力を意外に食うし、都市残留者の勤労奉仕的な耕作ではあまり期待できまい」（「菜園化は難事」）<sup>27</sup>とある。ちなみに柴田の手記には建物疎開でできた二丁目米田屋ビル裏の空地が畑となり、十月十七日にさつま芋の収穫をしたことが記されている<sup>28</sup>。

#### ④バラック建築

四月二十六日の新聞は、東京都の談話として、疎開建物で出た家屋の

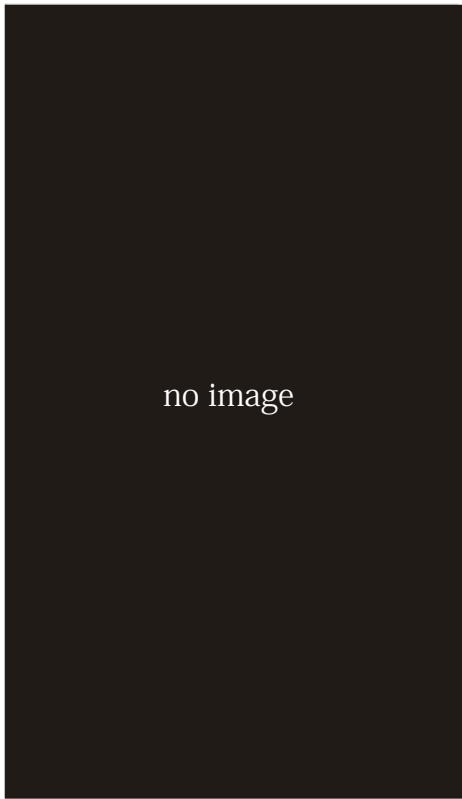


図4 銀座で家鴨を飼育していることを報じる 朝日新聞1944年11月5日2面

古材を被災者に優先的に払い下げると報じ<sup>29</sup>、五月二十八日には、都の防衛局長の談話として、焼け跡にバラックを建てることを奨励していることを伝え、記者の質問に答える形で次のような発言を紹介している。東京に残留している人の策として自力で仮住宅（バラック）を作ること、建物に関する法規には拘ってられないこと、それは壕舎というものでなくても、半地下式、地下式のもので空襲の被害を最小限に止められる家屋ならば差し支えないこと、焼け跡と土地に仮住宅を建てる際の土地の所有権の問題については国からの方針を待つこと、などである。さらに建物疎開で浮いた古材を被災者に回してもらえないのか、という質問に対し、五月十五日の空襲で相当が焼失してしまい、残ったものも軍需方面に回しているので一般都民への供給は難しい、と述べている<sup>30</sup>。

なお都が疎開指定地域（計七八九万坪）を全面的に解除するのは一九四六（昭和二十二年）四月二十日である<sup>31</sup>。

#### （二）空襲

銀座は一九四五年一月二十七日に初めて無差別的な本格的空襲を受けた。その後三月十日未明、五月二十四日未明、二十五日深夜と続いた<sup>32</sup>。

一月二十七日の最初の空襲は、その後の空襲での焼夷弾主体の爆撃ではなく、通常の爆弾を主体にしたもので、有楽町、日比谷から銀座四丁目、五丁目が被害の中心であった。着弾した場所としては、帝国ホテル裏庭、数寄屋橋横ニュートーキョー裏、朝日新聞社と日劇との間、有楽町駅中央改札、泰明小学校、銀座四丁目教文館ビル周辺、五丁目尾張町ピアホール、鳩居堂前などである。鳩居堂前の爆弾は地下鉄構内に到達して爆発、鳩居堂前にあった地下鉄の入口を破壊した。この時に通常の

爆弾とともに落とされた焼夷弾によつて、銀座四丁目、五丁目一帯が焼失した。四丁目は中央通りの西側、教文館から服部時計店の間、五丁目は中央通りの両側を焼き払った。なお、尾張町ビアホールに落下したのは不発弾で、一九六三（昭和三十八）年の地下鉄日比谷線の工事で見つかり、掘り出されている。<sup>33</sup>後に触れるが、この一月の空襲は直後から、石川光陽（一九〇四〜八九）、菊池俊吉（一九一六〜九〇）、関口満紀（一九一七〜四八）などの数人のカメラマンが現場で撮影をしており、その写真は広く伝えられている。被害の現場とその状況がある程度トレースすることができる。

後の三月と五月の二回の空襲は焼夷弾を中心としたものである。この二回の空襲で一丁目から四丁目までのエリアも大部分が焼失した。三月の空襲では一丁目は東側も西側も、二丁目は東側はオリンピックから南側部分が残れ、西側は米田屋ビルの一、二軒北で焼け止まったという。<sup>34</sup>ほとんどすべての木造家屋が焼失し、コンクリート造の耐火建築もそのほとんどは内部が焼失している。焼失を免れたのは一丁目から六丁目のエリアではごく一部である。七丁目、八丁目では大部分が焼失を免れている。

### （三）終戦後

戦後は焼け跡の整理が行われたが、その様子も写真からはうかがわれる。焼け残ったトタン板などの使えるものはバラックの材料に転用され、そのほかは瓦礫として捨てられていったが、その状況を記録している史料は少ない。写真からは捨てる場所もない多くの瓦礫は堀沿いの河岸や昭和通りなどに積まれていったが、後には三十間堀川がその処理の場となる。

中央通りや晴海通り中心部の空地には、一九四五年度の暮れには連続的な形でバラック建築の商店が建てられ始める。

また、銀座には占領軍向けの慰安施設やPXなどができた。

その皮切り、銀座松屋一階に進駐軍向けの案内所（サービスマスター・ステーション）が九月十日に開設され、松坂屋デパート地下のオアシス・オブ・ギンザは、一九四五年十一月二日に、四丁目交差点の服部時計店はPXとして翌三日に開設され、松屋デパートもPXとして接収される。

柴田の手記には彼女の父が九月八日に銀座通りを行進するアメリカの自動車の列を見ていること、そして「九月十三日になると、銀座通りを歩く米兵の後を日本人が追うようになった」「九月十七日に五階の窓から銀座通りを眺めていると、もう人の波は昔に戻ったようである。賑やかで騒がしい。違うのは、カーキ色の服を着たアメリカ兵が多いことだ。日本人の三分の一はいるだろうか」「九月一九日になると、銀座通りの人通りは、アメリカ兵が日本人の数の半分くらいになった」と記している。<sup>35</sup>

また中央通りには路上で売る露店が姿を現し始めた。占領軍関係者向けの土産物なども売られるようになった。「夜店ではなくて、昼間から店が出ている「昼店」である。今日はオリンピック・レストランの焼け跡の前で、蛇の目傘を売っていた。するとアメリカの水兵が十三人やつて来て、皆が一本ずつずらりと買って行った」（九月十七日）<sup>36</sup>。路上型の露店は、徐々に屋台型へと置き換わっていった。

元エビスビアホールは米軍のためのビアホールとして九月十二日から営業を開始し、文具店の伊東屋も一九四五年十一月中旬から「メリー・ゴールド」という名のダンスホールになった。<sup>37</sup>

震災跡地整理事業は、十月十八日、銀座二丁目二番地（米田屋脇）で

式典が行われ、同日直ちに着工された。<sup>38)</sup>

#### 四 一九四五年の銀座

##### (一) 対象となる写真群

現時点で筆者が把握している一九四五年の間に銀座を撮影した写真群を表1に示す。

このうち量的にもまとまりがあり、撮影時期をほぼ特定でき、撮影者を把握しうるプロジェクト型の撮影を挙げると、

- A 一月の空襲時の
  - A 1 石川光陽による撮影
  - A 2 東方社による撮影
  - A 3 日本写真公社国防写真隊による撮影
- B 八月末から九月上旬のアメリカ側による最初の報道撮影
  - B 1 陸軍航空隊のクレジット
  - B 2 LIFEのクレジット
  - B 3 ACMEのクレジット
- C 一月の文化社カメラマンによる撮影
- D 二月のアメリカ人従軍画家テッド・ギリアンによる撮影である。そのほか、
- E 随時行われていたであろうアメリカ軍による撮影
  - E 1 陸軍通信隊
  - E 2 海軍

は、NARAに所蔵されているオフィシャル写真で、プロジェクト型の撮影ではないが、撮影日をほぼ特定することが可能である。

さらに

F 第二次大戦博物館、トルーマン・ライブラリーなど米国の博物館等のインターネットサイト上にある一九四五年の銀座と思われる写真

もある。これらの写真は、撮影日や撮影者などの情報が明確でないものも含まれるが、重要な意味を持つ写真もいくつか含まれているため、補助的な史料として用いることにする。

本稿ではBとEを中心に、必要に応じて注意をしつつFも含めて考えることとする。Aの写真は参照源として利用する。

Bの撮影は終戦直後の東京の状況を報じる第一報になったもので、オフィシャル系・プレス系のクレジットを持つ写真が残されている。BのうちB1はNARAに所蔵されているもので、銀座の写真と明確にわかるものが四点ほどある。これらの写真の中には同行者が写されているものもあり、それと同じシチュエーションで撮影されたものが、B2やB3から見出されるし、Fの中にも散見される。推測する限りでは、航空隊の写真を撮るカメラマンとプレス系の撮影をするカメラマンは同道しており、ここで挙げたLIFE、ACME以外のカメラマンもいた可能性もある。彼らは芝、浅草など、銀座以外でも撮影をしている。この時の撮影ツアーについて、今回発見したことも少なからずあるため、稿を改めて記したい。なお、本稿で取り上げるのはストリートレベルの撮影であるが、ほかにも同じタイミングで東京各地を空撮している中に一部

表1 1945年に銀座を撮影した写真群

\*網掛けは本稿で対象にしないもの

	撮影時期	撮影者	組織	所蔵	『銀座と戦争』への掲載	『東京空襲写真集』『東京復興写真集』への掲載	掲載された出版物等
<b>A. 銀座空襲</b>							
A-1	1月27日	石川光陽	警視庁	個人蔵	○	○	『東京空襲秘録写真集』など
	1月27日	菊池俊吉	東方社	東京空襲・戦災資料センター／個人蔵	○	○	『戦中・戦後の報道写真』
A-2	1月27日	関口満紀	東方社	東京空襲・戦災資料センター	○	○	『戦中・戦後の報道写真』
	1月27日	不詳	東方社	東京空襲・戦災資料センター	○	○	『戦中・戦後の報道写真』
A-3	1月27日	撮影者不詳	日本写真公社国防写真隊	東京空襲・戦災資料センター		○	『戦中・戦後の報道写真』
<b>B. 8月末から9月上旬の米側最初の報道撮影</b>							
	8月25日以降	(空撮)	海軍	米国国立公文書館			『米軍が見た東京1945秋』など
	8月25日以降	(空撮) カール・マイダンス		(Google Arts & Cultureで閲覧可能)			<i>Flight Over Tokyo &amp; Atsugi</i>
	8月25日以降	(POWキャンプからの救出)	陸軍通信隊	米国国立公文書館			『米軍が見た東京1945秋』など
	8月25日以降	John Swop					<i>A Letter From Japan</i>
B-1	8月30日 - 9月2日		陸軍航空隊	米国国立公文書館			『米軍が見た東京1945秋』など
B-2		バーナード・ホフマン	LIFE	(Google Arts & Cultureで閲覧可能)			<i>Tokyo In Ruins</i>
B-3		スタンリー・トラウトマン	ACME	米国議会図書館			
<b>C. 11月の文化社カメラマンによる撮影</b>							
	11月	菊池俊吉	文化社		○	○	『東京 1945・秋』
		林重男	文化社		○	○	『東京 1945・秋』
		木村伊兵衛	文化社		○		『東京 1945・秋』
<b>D. 12月のテッド・ギリアンによる撮影</b>							
	12月	テッド・ギリアン		Charles E.Young Research Library, UCLA			
<b>E. 進駐後随時撮影されたオフィシャル写真</b>							
	8月-12月		陸軍通信隊	米国国立公文書館			『米軍が見た東京1945秋』など
	8月-12月		海軍	米国国立公文書館			『米軍が見た東京1945秋』など
<b>F. その他</b>							
	9月-12月	ジェターノ・フェーレイス					『マッカーサーの見た焼跡』
		師岡宏次		東京空襲・戦災資料センター／昭和館	○		『師岡宏次写真集』
		ジョージ・シルク		(Google Arts & Cultureで閲覧可能)			<i>Tokyo Essay</i>
		多数の撮影者		トルーマン図書館			その一部がウェブ上で閲覧可能
		多数の撮影者		第二次世界大戦博物館			

表中の書誌情報 平和博物館を創る会編『銀座と戦争』平和のアトリエ、1993／東京空襲・戦災資料センター編『決定版 東京空襲写真集 アメリカ軍の無差別爆撃による被害記録』勉誠出版、2015／東京空襲・戦災資料センター 監修『東京復興写真集 1945～46』文化社がみた焼跡からの再起』勉誠出版、2016／雄鶏社編集部編『東京空襲秘録写真集』雄鶏社、1953／『空襲被害を撮影したカメラマンたち 東京空襲を中心に (戦中・戦後の報道写真と撮影者の歴史学的研究－東方社カメラマンの軌跡)』政治経済研究所付属東京空襲・戦災資料センター戦争災害研究室、2017／『佐藤洋一『米軍が見た東京 1945 秋』洋泉社、2015／John Swopce “A Letter From Japan” 2015 “Flight Over Tokyo & Atsugi”, “Tokyo In Ruins”, “Tokyo Essay”(Google Arts & Culture)／『東京 1945・秋』文化社、1946／ジェターノ・フェーレイス『マッカーサーの見た焼跡』文藝春秋 1983／師岡宏次『師岡宏次写真集 想い出の銀座』講談社、1973

銀座が含まれてもいる。判明している撮影者名を挙げておく。最も初期の撮影隊に加わっていたうち、クレジットが明記されているのはスタンリー・トラウトマン (Stanley Trautman, ACME)、バーナード・ホフマン (Bernard Hoffman) であり、これに第二〇航空軍にアサインされたカメラマン、それにムービーのカメラマンも加わる。しかし彼らは専属ではなく、軍の各セクションや各報道機関からの仕事をアサインされて撮影しており、同一の撮影者が複数の機関からアサインされて撮影をしていた可能性もある。

ほかにクレジットが残る撮影者としては、ジョン・フロレア (John Florea)、カール・マイダンス (Carl Mydans)、ジョージ・シルク (George Silk)、アルフレッド・アイゼンシュタット (Alfred Eisenstaedt) (以上LIFE) などである。このうちカール・マイダンスは、おそらく八月三十日より以前に空撮を行っている。

Cの撮影をしたのは旧東方社に属するカメラマンたちで、A2と重なる撮影者が多い。Cの撮影は、一九四六年春に刊行される占領軍向け写真集『東京一九四五年・秋』<sup>39)</sup>のための撮影プロジェクトであると理解してよいと思われる。遡ると、彼らは戦時下においては雑誌『FRONT』の編集に従事しており、A2の撮影はそうした雑誌制作を念頭においた撮影プロジェクトでもあった。<sup>40)</sup> 彼らの撮影した写真データは東京大空襲・戦災資料センターにも保管されている。主な撮影者は、



以下の通り。

菊池俊吉・菊池家のご家族のご厚意で一九四五年十一月、一九四六年四月の撮影分のネガを検討している。撮影順も含めて検討が可能である。菊池のカットは『東京一九四五年・秋』『東京復興写真集』<sup>(4)</sup>『銀座と戦争』などに掲載されている。

関口満紀、林重男・『東京一九四五年・秋』『東京復興写真集』『銀座と戦争』に一部掲載されている。

木村伊兵衛・『東京一九四五年・秋』『銀座と戦争』に一部掲載されている。

Dは、米軍に画家として従軍していたテッド・ギリアン (Ted Gilien) による写真群で、個人の関心から撮影されたものとして、特徴的である。彼の写真は一九四五年十二月から四六年一月にかけてのものと思われるが、撮影場所の同定を行った結果、多数が銀座エリアのものと明らかになった。このコレクションはカリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) のチャールズ・E・ヤングリサーチ図書館 (Charles E. Young Research Library) 所蔵である。筆者は二〇一九年七月に彼の御子息を訪問し、写真使用に関する許諾をいただいている。

Eは、米陸軍、海軍が随時撮影を行っていたもので、米国国立公文書館所蔵のものである。一部はすでに日本でも紹介されている。

Fは、インターネット経由で検索、探したものである。メタ情報が不明なものも多く、史料として使う際にはやや注意を要する。

## (二) データベースの作成と整理

図5のような形式でデータベースを作成し、対象となる写真を整理し



図5 写真整理用データベース

た。本稿の執筆用に整理することが目的であるため、設定項目はシンプルにした。撮影場所（主に町丁目別）、撮影者、撮影時期、写真種別（オフィシャル、パーソナル、プレス）、テーマ、そして所蔵情報・ディレクトリ情報などである。

## 五 写真撮影位置同定の一般論

### （一）撮影位置の同定とは？

前章で紹介した写真の撮影位置を同定していった。その過程と結果について述べる前にこれまでの作業を踏まえて、一般的な写真撮影位置同定について考えを整理しておきたい。

写真位置同定とは撮影された場所がわからない人間が、写真に写された要素、写真が撮られた状況などを検討することを通じて、撮影地点を確定させていく一連の作業のことである。

同定の作業は、その写真に写された状況、すなわち撮影時期や撮影場所についてよく知る人間にとってみれば容易いものである。また撮影者のバックグラウンドや行動パターンを知る人間にとっても困難ではないかもしれない。つまり撮影環境や撮影状況の理解度によつて同定作業のあり方は異なる。

今回扱う一九四五年に都市部で撮られた写真に写されているのは、空襲を受け、大きな被害を被り、形を失い、破壊された街の姿である。その風景は今日とはかけ離れており、場所の手がかりが乏しく、どこで撮られたのかを想像することは難しい。当時を生き、記憶のある世代、すなわち八十代以上の方であっても、焼け野原の風景から場所を特定する

ことは容易いことではないだろう。

そのような難しさは、例えば東京の焼け野原として、これまで長く紹介されてきた写真の撮影場所が明示されていないことにも現れている。のみならず、終戦直後に米軍人が東京の焼け野原を撮影した写真の中には、撮影地が広島と表記されるものすらある。空襲による被害が人間の場所としてのよりどころを視覚的にも滅失させ、人々が生きる〈場所〉から人が生きた痕跡を消し〈非場所〉にしていくことの証左でもある、とも言えるだろう。そうであれば、特に撮影場所を正確に明らかにしなくても、それが〈非場所〉であると伝えることで、戦争の悲惨さと残酷さは伝わりうると思えられるからだ。とはいえ、この見方は、結果的には、どこかの時点で写真を見ることを停止させ、読み手の読みたい物語に写真を回収していくことになる。

しかし写真とは、本質的に物語に回収しきれない記録である。都市空間で撮られた写真は、焼け野原で何も写っていないかのように見えても、撮影行為を介した、特定の時点における固有の空間の記録である。

写真作画の面においては意図せざる要素が映り込むメディアでもある。特に都市空間で撮影された写真は、撮影主体が完全に作画をコントロールすることができない。それが焼け跡の写真であっても、様々な要素が映り込んでいる。

その写真は何らかの意図に基づいて撮られたものであっても、写真から何を読み取るのかは、読み手に委ねられている。本稿では写真に含まれる重層的な意味を読み取ろうと試みるものである。

本稿で扱う写真の位置同定とは、物語的な読みや固定化した観念から意識的に離れ、写真史料が持つ記録性をより多く汲み取ろうと写真に向

き合う作業の一形態である。

## (二) 成分分析とコンテキスト調査

以下、同定にあたっての具体的な方法について示したい。同定は大きく、以下の二つの方向性を持つ作業が組み合わさって進んでいくことが多い。第一は、写真の中に映された情報、具体的には建物、道路、橋といった構造物や看板などに書かれている文字情報などを細かく検討していくというものである。写真の〈成分分析〉と言えるだろう。

第二には、この写真を取り巻いている大きな絵、すなわち前後のカットなどから、より広範囲の空間の中の中の部分を占めているのかを想像していくというものである。これはその写真の前後に広がる時間や空間を想像するもので、〈コンテキスト調査〉と言えるだろう。

焼け跡の写真の位置同定が難しいのは、写真の中に写された要素が少なく、成分が少ないように見えるためである。建物が焼け落ちていけば、当然看板などもなく、文字情報も非常に少ない。また町並みも焼失し、焼け残ったランドマークも限られている。さらに建物が焼けてしまったことで、写真の中の距離感が掴みにくいことも難しさを増幅させる。

そこで本稿では複数の写真などの組み合わせからコンテキスト調査を行うことを重視し、写真の複合的な活用を試みたい。焼け跡の写真の調査に伴う困難さを乗り越えるための一手段となりうる<sup>(4)</sup>と考えるためである。

## (三) 一般的な着目点

以下箇条書き的ではあるが、主なポイントを書き出しておこう。

### ① 都市の構造的要素を見つける

都市の大きなマップ上で、どのエリアにいるのかを絞り込めれば、読みの手間は相当省くことができる。具体的には、引いた写真であること、画面上に何か遠景が写りこんでいれば、撮影された方角などは判別しやすい。通常、川や橋・鉄道・道路などのインフラストラクチャー、遠景に見えるランドマーク的な建物は手がかりにしやすい。

### ② 街路を観察する

町で撮影された写真の主な舞台は街路であり、特に意図せず写り込んだ街路上のモノから、様々な情報を読み取ることができる。特に街路の構成は普段気にすることはないものだが、街路を特定する上で手がかりにもなる。具体的には、街路の構成で街路を特定する(舗装や非舗装など路面の状態、路面電車の線路、歩道や街路樹の有無、沿道建物の配置など)ことや、ミクロな街路占有物から判断する(バス停・ポスト・街路樹の位置、敷石の形、塀の形、防火用水枘など)ことが可能である。

### ③ 写り込んだ文字情報を解読する

画面上でデジタル画像を拡大していくことで、判読できる文字は多い。本稿の対象の焼け野原の写真は、多くの場合、得られる文字情報が極端に少ないが、得られた文字情報からの調査で場所の特定に進むことは多い。例えば、看板や住居表示板の文字情報、これはそのまま場所の特定に結び付く。また、看板の存在で、その写真が撮影された場所の地域性を読み取れることも多い。演劇、映画、講演などのポスターは撮影年月の特定に一般的に使えらるものである。

#### ④「消え物」の要素を見つけて意味を探る

動きのあるもの、時々刻々と変化する要素も写真には写り込んでいる。例えば、日の当たり方、影のつき方で、画面上の方角が絞られる。あるいは路面電車やバスの姿や系統番号、路面の状況（濡れているか）なども重要な情報である。そのほか、人の集まり具合や通行の様子などから、町のアクティビティや地域性を読むこともできる。また、建設工事の現場（工事期間、竣工時期との関係）、祭りやイベントなども、撮影時期を特定するにはとても有効である。

## 六 ケーススタディ

今回の銀座での写真同定の実践での試みと解説例を以下に示す。

### (一) 同定作業の結果

判明した写真の撮影地点を地図上にプロットする(図6)。

南北方向に伸びる中央通りと東西方向の晴海通りが分布の中心であることがわかるが、相互に写真を参照しながら場所を同定していくという作業の性質上、近接する場所の写真は同定しやすいという傾向はある。また中央通りはほぼ満遍なく写真があるため、空間を連続的に復元できる可能性があることがわかる。

### (二) 空撮写真・俯瞰写真

空撮写真や、ビル屋上などからの俯瞰的な写真は場所同定を進める上でベースである「大きな画」となる。

#### ①空撮写真

作業上有効性が高かった写真は四枚あり(写真1〜4)、写真1は米陸軍通信隊撮影、残りの三枚は第二次大戦博物館のウェブサイトで提供されているものであった。これらの三枚の詳細は不明な点が多いが、一九四五年十月撮影のものときられている。

#### ②俯瞰写真

ビル屋上等からの俯瞰写真のポイントとなっていたのは、以下の七地点である。北から順に

- ・京橋三丁目第一生命館屋上(写真5〜7)
- ・銀座四丁目三越百貨店から(写真8)
- ・銀座五丁目松坂屋商事部ビルから(写真9)
- ・銀座六丁目松坂屋から(写真10・11)
- ・銀座六丁目交詢社から(写真12・13)
- ・銀座八丁目日本映画新社から(写真14)
- ・芝新橋一丁目第一ホテルから(写真15)

### (三) 試み① 映像のパノラマ化

先に述べた通り、場所の同定に際しては「大きな画」があると、個々の写真の同定作業を進めやすい。本稿での作業を進めるに際し、映像からパノラマ写真を起こす作業も行った。三脚を立て、パンニングをしているカットであればパノラマ写真化するアプリケーション<sup>43</sup>を使うことで、容易にパノラマ画を得ることができる。元の映像は米国の公的なサイト、あるいは映像を販売しているサイトにアップロードされているも



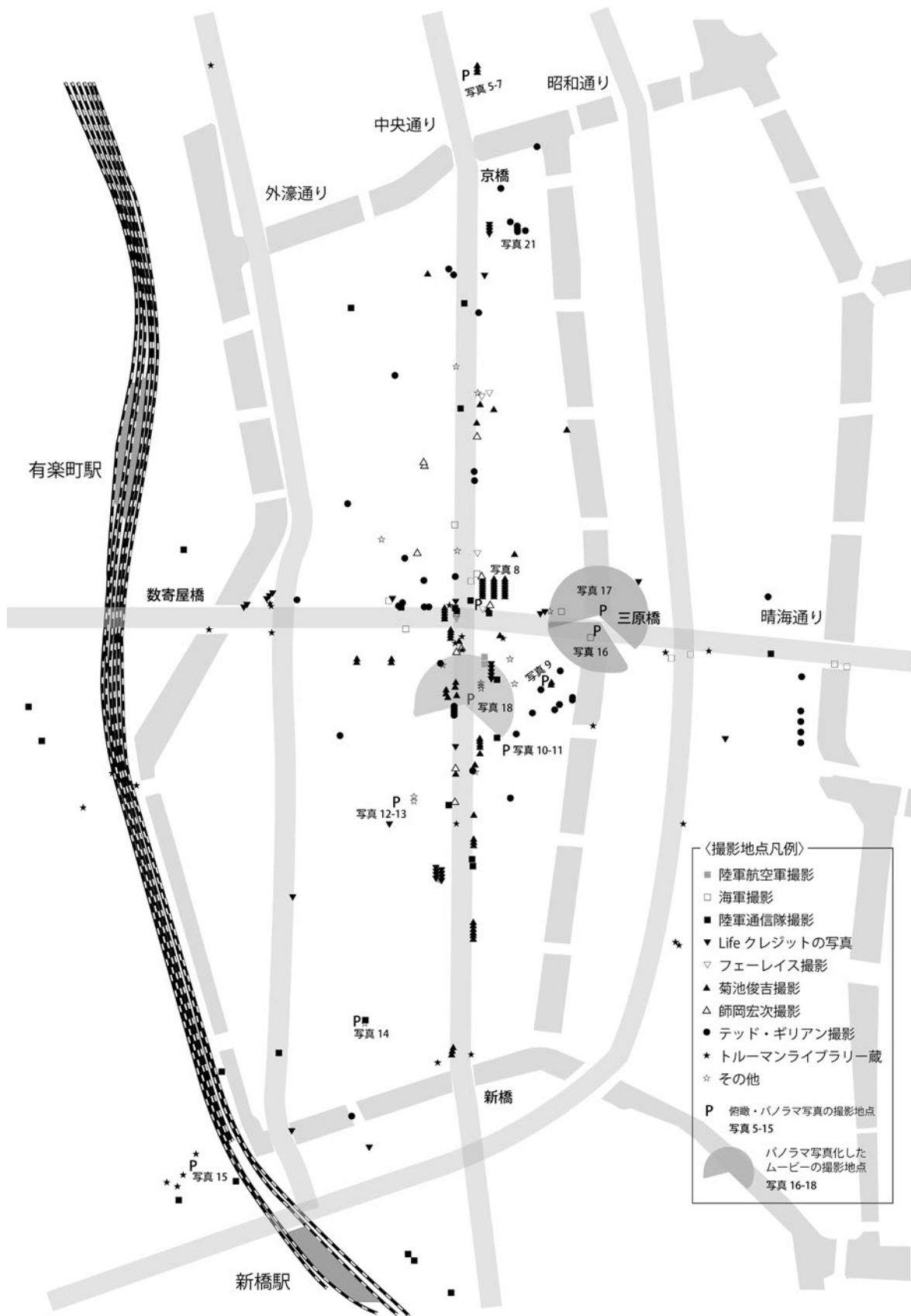


図6 撮影場所が同定された写真の分布



写真2



写真1



写真4



写真3

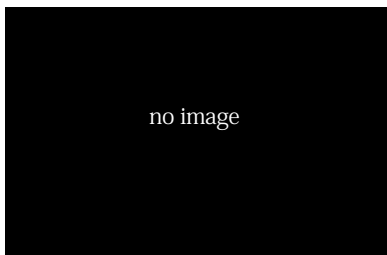


写真7

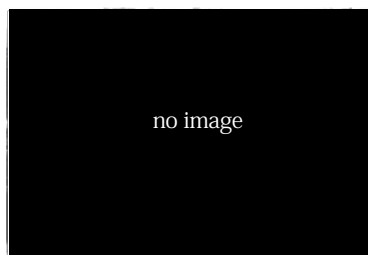


写真6

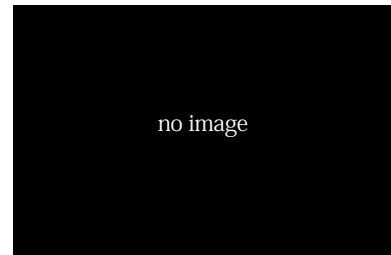


写真5

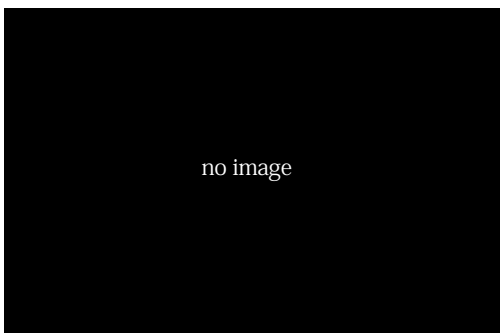


写真9



写真8

占領期写真の複合的活用に関する試み——1945年東京・銀座のケーススタディ——



写真13



写真12



写真10/11



写真15



写真14

- 写真 1 銀座8丁目から新橋駅付近 1945年9月28日米陸軍通信隊撮影 米国国立公文書館所蔵 (111SC-289982)
- 写真 2 銀座6丁目から有楽町方面 ソースのタイトルは"Standing Buildings Surrounded by Bomb Sites, Tokyo,1945" Official Photograph U.S. Navy.Tokyo, Japan. Circa 1945 第二次世界大戦博物館所蔵 (2013.436.010)  
<https://www.ww2online.org/image/standing-buildings-surrounded-bomb-sites-tokyo1945>
- 写真 3 数寄屋橋から外濠を北方向へ ソースのタイトルは"Aerial views of bombing damage to Tokyo, Japan in October 1945" 1945年10月米陸軍通信隊撮影 第二次世界大戦博物館所蔵 (2008.354.683\_1)  
<https://www.ww2online.org/image/aerial-views-bombing-damage-tokyo-japan-october-1945>
- 写真 4 築地から東方向へ ソースのタイトルは"Aerial views of bombing damage to Tokyo, Japan in October 1945" 1945年10月米陸軍通信隊撮影 第二次世界大戦博物館所蔵 (2008.354.684\_1)  
<https://www.ww2online.org/image/aerial-views-bombing-damage-tokyo-japan-october-1945-0>
- 写真 5 京橋3丁目第一生命館屋上から三十間堀方面 1945年11月菊池俊吉撮影
- 写真 6 京橋3丁目第一生命館屋上から中央通り方面 1945年11月菊池俊吉撮影
- 写真 7 京橋3丁目第一生命館屋上から外堀・有楽町方面 1945年11月菊池俊吉撮影
- 写真 8 三越百貨店よりの俯瞰ショット 複数の写真を合成しているもの 1945年12月か? 師岡宏次撮影 昭和館所蔵
- 写真 9 松坂屋商事部の建物からのショット 1945年11月菊池俊吉撮影
- 写真10 松坂屋屋上から。Aerial views of bombing damage to Tokyo, Japan in October 1945.jpg 1945年10月米陸軍通信隊撮影 第二次世界大戦博物館所蔵 2013.436.010  
<https://www.ww2online.org/image/aerial-views-bombing-damage-tokyo-japan-october-1945-1>
- 写真11 松坂屋屋上から 1945年9月24日米陸軍通信隊撮影 米国国立公文書館所蔵 (111SC-211934)
- 写真12 交詢社ビルから 撮影年月の明記はないが、周辺の状況から1945年秋と思われる。ソースのタイトルは"Ginza, Tokyo" 39th Bomb Group撮影  
<http://39th.org/39th/history/damagephotos/ginza.htm>
- 写真13 交詢社ビルから 撮影年月の明記はないが、周辺の状況から1945年秋と思われる。ソースのタイトルは"Ginza, Tokyo Retail & Commercial Area" 39th Bomb Group撮影  
<http://39th.org/39th/history/damagephotos/ginza.htm>
- 写真14 銀座8丁目の空地 疎開空地と思われ、日本映画新社ビルから撮影したと思われる。1945年8月30日米陸軍通信隊撮影 米国国立公文書館所蔵 (111SC-211375)
- 写真15 第一ホテルからの俯瞰撮影 ソースのタイトルは"Street Scene in Tokyo" 1945年Edwin Pauley撮影 トルーマン図書館所蔵  
<https://www.trumanlibrary.gov/photograph-records/2009-80>





写真18 銀座5丁目でパン撮影したムービーからスティッチング ソースは"WW2 Street Scenes Of Damaged Tokyo, 09/06/1945"  
1945年9月か 米海軍撮影(?)  
<https://www.youtube.com/watch?v=MpKm9jtRG7o>





写真16



写真17



写真18

写真16 三原橋から北側をパン撮影したムービーからスティッチング ソースは"Bomb damage done to Kyobashi district in Tokyo Japan." 1945年9月13日、7th AAF Combat Camera Unit撮影

[https://www.criticalpast.com/video/65675025167\\_Bomb-damage-Done-to-Kyobashi-District\\_canal\\_main-district\\_boat](https://www.criticalpast.com/video/65675025167_Bomb-damage-Done-to-Kyobashi-District_canal_main-district_boat)

写真17 三原橋から南側をパン撮影したムービーからムービーからスティッチング ソースは"Demolished Office Buildings and Stores in Tokyo, Japan seen a month after the end of World War 2."1945年9月13日、7th AAF Combat Camera Unit撮影

[https://www.criticalpast.com/video/65675025168\\_Demolished-Buildings\\_office-buildings\\_departmental-stores\\_Shinbashi-theater](https://www.criticalpast.com/video/65675025168_Demolished-Buildings_office-buildings_departmental-stores_Shinbashi-theater)

ので、いずれも終戦直後の銀座で撮影されているものである。

・三原橋から北方向〔写真16〕

・三原橋から南方向〔写真17〕

・尾張町交差点南東部分（銀座五丁目）〔写真18〕

#### （四） 試み② 建物リストの作成

実際の場所を推定するに際しては、画面内に写り込んだ建物が場所の手がかりになる。したがってはつきりと場所がわかるいくつかの写真を組み合わせながら、地図にプロットし〔図7〕、建物リストを作成した。ベースマップとしたのは一九五〇年代前半に制作された火災保険特殊地図<sup>44</sup>である。この地図の原図は縮尺六〇〇分の一で、すべての建物の輪郭線が記されている。終戦後五年から一〇年が経過しているが、焼失を免れた建物は概ねそのまま利用されていたため、焼け残った建物の存在を確認するには有効なデータとなりうる。

#### （五） 解読例

以下では、銀座一丁目と五丁目の例をとって、実際の同定作業の進め方を示す。その上で、同定のワークフローを整理することを試みる。

##### ① 銀座一丁目の場合

銀座一丁目の主な検討材料となったのは、結果的には写真群Dのテッド・ギリアンの写真である。しかし当初よりこれが銀座一丁目の写真であると判明していたわけではなかった。

彼の写真は敗戦直後の焼け跡で撮影されたものが多く、場所の目印と

なるような建物や商店名などの情報が不足しているが、東京都心部で撮影されたと見られるものが複数枚見出された。そのため、焼け跡の風景の大多数もやはり東京で撮影されたものだろうと仮定して、写真の分析を進めた。

米国でのオリジナルの写真の所蔵形態は、地域別・被写体別に一二のフォルダ<sup>45</sup>に分かれていた。しかし整理の基準は曖昧にしか理解できないもので、別の分類に入るべきと思われる写真が、混在している例が多かった。そこで、写真の裏に記された整理番号とみられる文字・数字や二種類あつたフォーマットの違いを元に分類し直すこととした。

その結果、整理番号にアルファベットのKが付された写真のうち六枚が、写っている人物や金庫、背後の建物などから同一の地点を様々な角度で撮影したものであるように思われた〔写真19・20〕。ほかの整理番号のグループでも同じ被写体・近い場所で撮影された写真が集まったため、この方法によれば撮影時に近い秩序が見出されると考えられた。

Kが付された六枚の写真のうち背景が明確な五枚をphotoshopで合成して<sup>46</sup>横長の画像を作成することができた。これによって写真間の連続が確認され、また背後に写っている建物の位置関係がひと目で把握可能となり、撮影された空間の状況が認識できるようになった〔写真21〕。完全な同一地点から撮影されたものではないために写真間でズレが生じ、手前に位置する同一被写体が二度画面上に現れることになったが、上記の目的を主として作成したものであるためにこの点は考慮せずに、作業を進めた。

合成後も撮影場所を示唆するような特徴は得られず不明のままであったが、合成には使用しなかった一枚に写っている金庫に「鈴木機械商店」

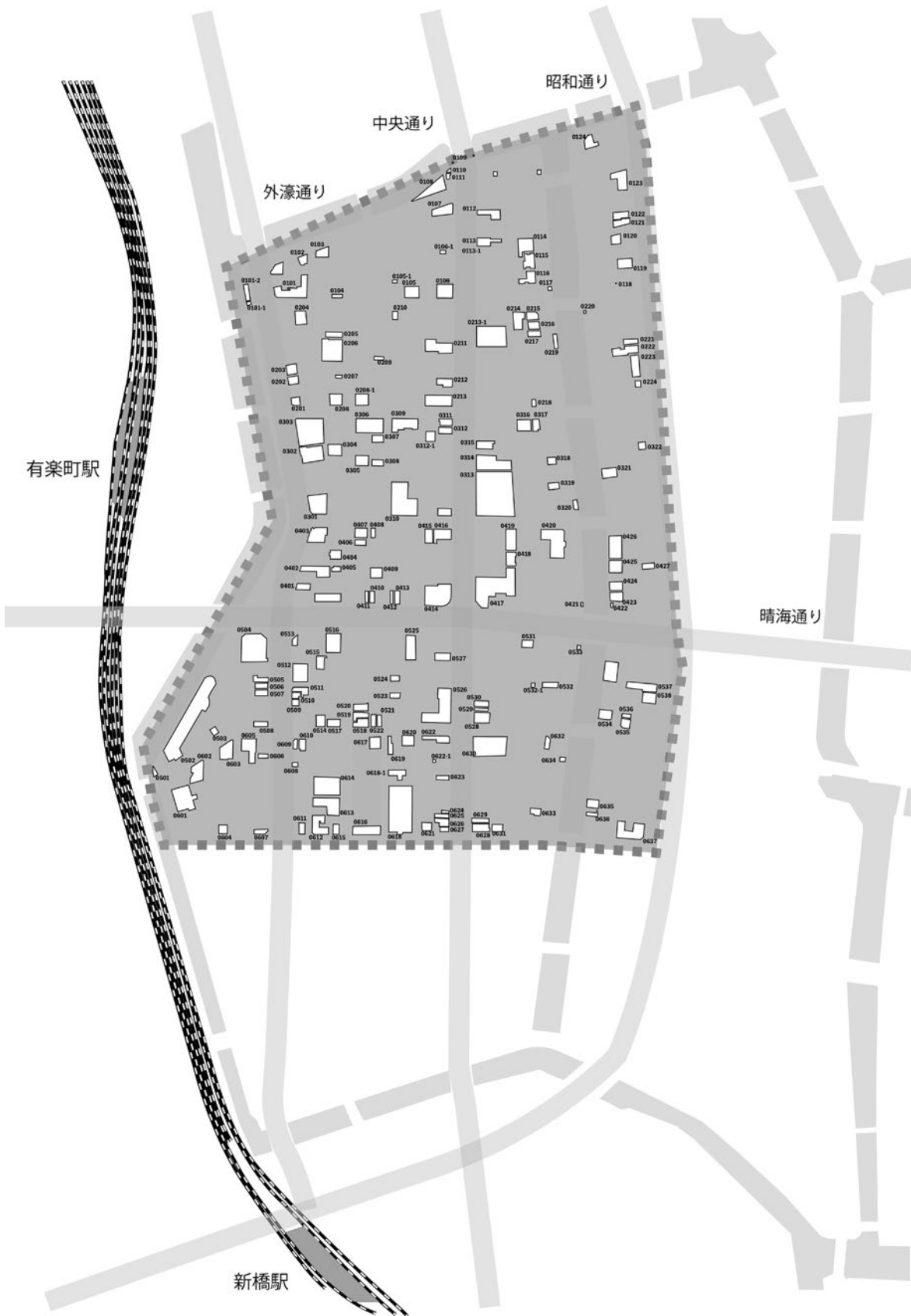


図7 写真から残存が確認できた建物  
小さい数字はナンバリング。それぞれの写真とともにデータベースを作成し、建物の特徴を言語化して共有すれば、場所の同定の重要なツールとなる



と書かれており(写真22)、一九四二(昭和十七)年の電話番号簿<sup>(47)</sup>を引くと同名の会社が銀座にあることが見いだされ、一九一九(大正八)年の官報<sup>(48)</sup>には、同名の商店の広告で住所が銀座一丁目二二番地である事が示されていた。

これらが同一の商店であるのか、また空襲時点で鈴木機械商店がどこにあったのかは不明のままであった。

一方、一九四五年十月に撮影された空撮写真(写真4)を当たると、銀座一丁目からこのような低層の建築物が並ぶ風景が撮影可能なのは、東に位置する三十間堀方面を望んだ一方向に限られており(写真23・写真4の部分拡大)、改めて写真を一枚ずつ子細に検討したところ、整理番号K10には人物の背後に堀の石積み構造物と見られるものと橋らしきものとを確認でき、同地点から撮影されたと仮定すればこの橋は水谷橋に該当

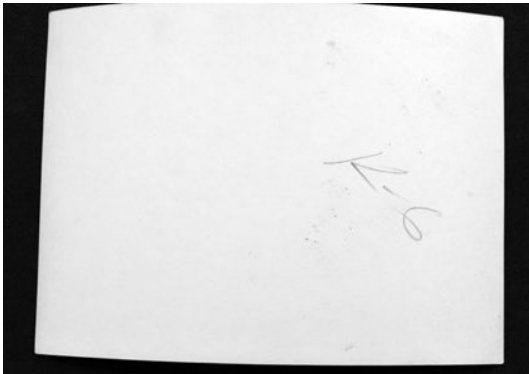


写真19/20

テッド・ギリアンコレクションの写真の多くは裏面に整理番号の書き込みがあった 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンジェルス校チャールズ・E・ヤングリサーチ図書館所蔵

することになる(写真24・26)。また橋の先には京橋小学校に相当しそうな建物も見受けられた。

空撮写真はギリアンの写真とは真逆の方向から撮影されており、確実に同定するには難があつたが、同地点である可能性が高まつた。並行してほかの写真の収集調査とマッピングを進めてゆくうちに、菊池俊吉が一九四五年十一月に撮影した銀座一丁目およびその付近の写真に行き当たつた(写真5)。ギリアンの写真とほぼ同時期であり、この一枚でギリアンの写真に写っている建物の多くを確認することができたため、当初の見当通りに現在の銀座一丁目九番地付近から三十間堀に向かって撮影されたことを確定することができた。

## ②五丁目(尾張町交差点南東側)の場合

一九四五年に尾張町交差点南東側の銀座五丁目およびその付近を撮影した写真群には、先に示したコレクションではD群のテッド・ギリアンのほか、B群にあたるTime-Life社のカメラマンであるバーナード・ホフマン、ACME社カメラマンのスタンリー・トラウトマン、そしてアメリカ陸軍第二〇航空軍のクレジットのものが知られている。撮影地点が五丁目に集中しているのは、銀座の中心である四丁目交差点に面し、ほぼ無傷の建物(服部時計店や教文館)と焼けた建物(銀座三越)、ほぼ焼けてしまった銀座五丁目東というコントラストに富んだ画像が得られたことが大きいと考えられる。

それぞれの撮影者が撮つた写真群にはひと目でこの場所だと判明するものが数枚ずつ含まれているものの、同一の撮影者によるまとまりのある写真群の中には、撮影場所がわからない焼け跡写真が多数を占めてい



写真21



写真22



写真23

写真24



写真25



写真26





写真29



写真28



写真27



写真31



写真30

- 写真21 背景情報に注目して5枚の写真(写真19、24を含む)をphotoshopで合成したもの 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンゼルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館
- 写真22 鈴木機械商店の文字が書かれた金庫(トリミング) 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンゼルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館
- 写真23 写真4の部分拡大(Aerial views of bombing damage to Tokyo, Japan in October 1945) 米陸軍通信隊 第二次世界大戦博物館所蔵 2008.354.684\_1  
<https://www.ww2online.org/image/aerial-views-bombing-damage-tokyo-japan-october-1945-0>
- 写真24 整理番号K-10の写真 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンゼルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館
- 写真25 写真24の人物左側に見える橋の拡大(トリミング) 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンゼルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館
- 写真26 写真24の人物の背後に見える建物の拡大(トリミング) 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンゼルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館
- 写真27 銀座5丁目(4丁目交差点南東角) 1945年8月30日-9月1日米陸軍航空軍撮影 米国立公文書館所蔵 342FH-3A-3903
- 写真28 銀座6丁目(現GINZA SIX)から南をむいて 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンゼルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館
- 写真29 写真28の撮影位置 銀座5丁目付近 航空写真の一部をトリミング 1947年9月8日米軍撮影 国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス USA-M449-109  
<https://mapps.gsi.go.jp/contents/ImageDisplay.do?specificationId=1179169&isDetail=true>
- 写真30 銀座5丁目の三間堀沿いの通りから南方向 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンゼルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館
- 写真31 写真30の撮影位置 銀座5丁目付近 航空写真の一部をトリミング 1947年9月8日米軍撮影 画像ソース：国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス USA-M449-109  
<https://mapps.gsi.go.jp/contents/ImageDisplay.do?specificationId=1179169&isDetail=true>



る。翌四六年になると復興が進み、焼け跡がバラックで覆われ、彼らが好んで撮影した焼け残った金庫や建物の細部が確認できなくなる。また焼け跡の中に立つて撮影することもできなくなる。逆に言えば四五五年の写真は、焼け跡空間という特殊な時空の中の独特の視角を持った写真であるため、その時期に撮影された写真を互いに参照しながら作業する以外に同定する方法がないとも言える。焼け跡空間での同定作業が困難な点は、焼け残った建物が限られているため、被写体との距離感が現在の経験的な感覚と一致しにくいのである。図7で示したように焼け残った建物をまずは明確に認識し、それを基準にしながら空間的な関係を想像していく必要がある。

#### (六) ライオンとスエヒロ

まずわかりやすい写真を例として挙げると、第二〇航空軍のクレジツトの入った写真27は右奥に銀座三越、左奥に教文館が写っていることから、銀座四丁目交差点の南東、五丁目から北東の京橋方面に向かって撮影されたことがわかる。

写真28はギリアンの写真の一枚である。右奥に写っている建物は現ピアホールライオン銀座七丁目店（以下ライオン）であることが既存の多くの写真から同定でき、また改装はされているものの現存しているため、六丁目の現GINZA SIXを貫通する通りから南を向いて撮影されたことがわかる。おおよその撮影位置と画角を一九四七年九月撮影の航空写真を用いて写真29に示す。右上が銀座四丁目交差点で、右中央から下中央にかけての黒い筋が三十間堀である。上下が南北となる。

同様にギリアンの写真30の右上にも同じ向きから見たライオンが写っており、また道の左側に見える火の見櫓は京橋消防署銀座出張所に相当する。撮影位置がこれらの建物からどの程度離れているのかこの写真から把握するのは難しいが、晴海通りと見られるような広幅員の道路が確認できないため、五丁目の三十間堀沿いの通り（現銀座三原通り）で撮影されたと考えられる（写真31）。中央に写っている東の角を切り落とした建物はギリアンの写真32にも見られる。

また写真33の男性を写した写真の奥にも角を切り落とした建物が見られ、その奥には六階建て以上の大きな建築が聳えている。この写真33と写真31・32の建物が同一だとすると、大きな建築は銀座松坂屋に相当することになり、これまでの推定と矛盾はない。この角を落とした建物は戦後に出された各種地図上では「ピフテキ スエヒロ」と書かれており、ウエブ上で画像検索すると一九八七年の外観画像がヒットする<sup>49</sup>。この画像に見られる建物とギリアンの写真の建物とは細部に違いがあるものの一致点が多く、同一の躯体が八七年時点まで存在していたと思われる。

この写真33と同じ男性を写したギリアンの写真がほかに二枚存在する（写真34・35）。背後の壁から見て同一地点で角度を変えて撮影されたと思われる。写真7には水路と橋が写っており、スエヒロからの距離を考えると三十間堀ではなく築地川と万年橋に相当する。この壁は木村伊兵衛が采女橋上で撮影した写真にも写っており（参考画像1）、壁の上げ方が同じであるのが確認できる。この壁は複数の進駐軍関係者が撮影した写真やムービーにも写っており（参考画像2）、この近辺が彼らの焼け跡散策コースであったことがうかがえる。またこの男性はエイゼンシュタットが撮影した写真にも写っている。



写真36



写真32



写真34/35



写真33



写真38



写真37



写真39/40



写真41



(七) 工業品検定所と金庫

国土地理院で公開されている終戦後の航空写真<sup>50</sup>を見ると、写真33の左側に写っている建物は現中央区銀座六丁目一五番地に位置する、三つの建物の集合体であることがわかり(写真36)、戦後の火保図には通産省工業品検定所と工業技術院中央計量検定所と記されている。

この工業品検定所に関する情報は少なく、いつ取り壊されたのは定かではないが、それなりの数の戦後の写真を見ることが出来る(写真37)。

写真38は米国議会図書館に収蔵されている“Tokyo's Fifth Avenue in shambles”<sup>51</sup>と題されたトラウトマンの写真であるが、工業品検定所が左奥に見える。中央の建物は壁の汚れが先に触れた写真30に写っているスエヒロのものとは一致することから(写真39・40)、銀座五丁目東から南を向いて撮影したものだと思われる(写真41)。またここに写っている米軍の制服を着た二人の人物は写真27の第二〇航空軍クレジットの写真に収められた同一人物と見られるため、同じ機会に撮影されたと考えられる。

第二〇航空軍クレジットの写真42は写真38とほぼ同じ位置で撮影されたものであり、画面内に見える二人の人物が同一であるため、同じ時に連続して撮影されたものだとことがわかる。わずかに立ち位置が異なっているため、左手前に金庫が写っている。ホフマンの写真43もほぼ同一地点で撮影されたものであり、別アングルの写真数枚(参考画像3・4、写真44)にはこの金庫が写っている。金庫は北東側と南東側に九〇度の角度に二つ並んで設置されており、これらの向きでどの方向を向いて写真を撮影したかが把握できる。

第二〇航空軍の写真45では東京という以外の具体的な場所は示されて

写真32 瓦礫、土砂などが積み上げられた銀座5丁目の三十間堀沿い 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンジェルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館

写真33 築地川付近から西方向をみる 左上の2棟は工業品検定所 その右手の奥にスエヒロと松坂屋百貨店が見える 写真36の航空写真に撮影地点を表示している 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンジェルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館

写真34, 35 写真33と同じ場所で 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンジェルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館

参考画像1 築地川の采女橋から西側 1945年11月木村伊兵衛撮影 所収：『銀座と戦争』pp.204-205

参考画像2 ムービー“American sailors mingle with Japanese on streets in Nagasaki, Japan after the end of World War II”.  
3カットのパンニングショットに壁が写っている。  
[https://www.criticalpast.com/video/65675055940\\_civilians-walk-on-street\\_damaged-buildings\\_United-States-flag\\_Japanese-personnel](https://www.criticalpast.com/video/65675055940_civilians-walk-on-street_damaged-buildings_United-States-flag_Japanese-personnel)



写真36 写真33の撮影位置を表記している 航空写真の一部をトリミング 1947年9月8日米軍撮影 画像ソース：国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス USA-M449-109

<https://mapps.gsi.go.jp/contentsImageDisplay.do?specificationId=1179169&isDetail=true>

写真37 昭和通りを南方向に 左手の建物が工業品検定所 1945年10月6日米海軍撮影 米国国立公文書館所蔵(80G-box1438-374462)

写真38 銀座4丁目交差点南東の銀座5丁目。左手奥に見えるのが工業品検定所。1945年8月30日-9月1日Stanley Troutman撮影 米国議会図書館 New York World-Telegram and Sun Collection(Japan-Tokyo-War Damage)770794

写真39 スエヒロ壁面の汚れ 写真40の拡大 1945年8月30日-9月1日Stanley Troutman撮影 米国議会図書館所蔵 New York World-Telegram and Sun Collection(Japan-Tokyo-War Damage・770794)

写真40 スエヒロ壁面の汚れ 写真30の拡大 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンジェルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館

写真41 写真40の撮影位置を表記している 航空写真の一部をトリミング 1947年9月8日米軍撮影 画像ソース：国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス USA-M449-109

<https://mapps.gsi.go.jp/contentsImageDisplay.do?specificationId=1179169&isDetail=true>



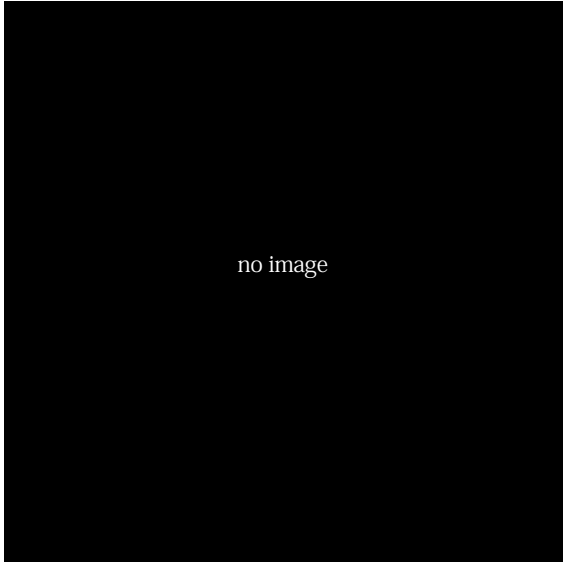


写真43



写真42



写真45



写真44



写真47



写真46

おらず、また背景に何ら特徴的な建物が写っていないが、ホフマンのこの写真で同一人物を撮影したものだというのがわかり、撮影地点が多いことからほぼ同じ瞬間に撮影されたとみられ、第二〇航空軍クレジットの写真の撮影者とホフマンもまた同じ時に同じ場所にいたと見られる。

写真44には金庫二つに加えて中央奥に歌舞伎座と築地本願寺が見えており、五丁目から南東を向いて撮影されている。右側には丸型と三日月型の窓が印象的な建物が、その手前には土蔵らしき建物の一部が見える。この二つは窓の配置などからギリアンの写真46に写っている建物に相当することがわかる。三日月窓の建物は火保図では松坂屋商事部となっている。写真46の中央の金庫と右側の松坂屋商事部との間に見える木造の建設途中の片流れ屋根の建物は同じくギリアンの写真47に写っているものと同一に見える。これは晴海通りに南側に面した商店バラック建築の裏側を撮影したものと思われ、左手奥は銀座三越、右奥の足場が組み立てられている建物は王子製紙に相当する。

写真48の柱が露出した特徴的な建物は晴海通りに面し三越の斜め向か



写真48



写真49

写真42 銀座5丁目(4丁目交差点南東角) 原シリーズ名"Tokyo In Ruins" 1945年8月30日-9月1日 Photo by Bernard Hoffman/ The LIFE Picture Collection/Getty Images

写真43 銀座5丁目(4丁目交差点南東角) 原シリーズ名"Tokyo In Ruins" 1945年8月30日-9月1日 Photo by Bernard Hoffman/ The LIFE Picture Collection/Getty Images

参考画像3 銀座5丁目(4丁目交差点南東角)

原シリーズ名"Tokyo In Ruins" 1945年8月30日-9月1日 Bernard Hoffman撮影  
<https://artsandculture.google.com/asset/tokyo-in-ruins/YAGtJZdK1m--7Q?hl=ja>



参考画像4 銀座5丁目(4丁目交差点南東角)

原シリーズ名"Tokyo In Ruins" 1945年8月30日-9月1日 Bernard Hoffman撮影  
<https://artsandculture.google.com/asset/tokyo-in-ruins/dQHpJ5JAU1077g?hl=ja>



写真44 銀座5丁目(4丁目交差点南東角)原シリーズ名"Tokyo In Ruins" 1945年8月30日-9月1日 Bernard Hoffman撮影  
<https://artsandculture.google.com/asset/tokyo-in-ruins/FQEDBIWBIYb8Uw?hl=ja>

写真45 銀座5丁目(4丁目交差点南東角)1945年8月30日-9月1日米陸軍航空軍撮影 米国国立公文書館所蔵(342FH-3A-3887)

写真46 銀座5丁目(4丁目交差点南東角)の金庫 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンジェルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館

写真47 銀座5丁目 瓦礫の処理か、地盤の整備であるうか 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンジェルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館

写真48 銀座5丁目(4丁目交差点南東角)の石灯籠 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンジェルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館

写真49 写真38の拡大 写真48と同じ石灯籠と思われる 1945年8月30日-9月1日Stanley Troutman撮影 米国議会図書館所蔵 New York World-Telegram and Sun Collection(Japan-Tokyo-War Damage・770794)

いに建つ小野ピアノの本店ビル<sup>⑤</sup>である。ホフマンの参考画像3にも写っているこの建物は、戦後しばらく周りに高い建物が建つことがなかったため占領期写真に多く写っているが〔写真9・写真11など〕、復興が進むとともに周囲の街並みに埋もれていったためか、管見では言及されているものを知らない。手前の灯籠が小野ピアノからどのくらい離れているかは非常にわかりにくいのが、先に触れたトラウトマンの写真40の右端に写っているものが同じだと考えられる。

今後撮影位置をさらに細かく確定することにより、このような焼け跡に遺された物体の位置関係も把握して地図上にプロットできるようになり、元々どの建物のものであったのかもわかるだろう。

#### (八) まとめ 位置同定作業のワークフロー例

銀座一丁目のケースでは、以下のような手順で作業が進められた。

- ① 史料そのものの整理による元の秩序の再建
- ② 再建された秩序に基づいた写真間の関係の確認
- ③ 連続した写真の合成による撮影空間の拡張・把握
- ④ 文字情報による調査
- ⑤ 地図および航空写真上での検討
- ⑥ ⑤の情報に基づいた写真の再検討
- ⑦ 同じ場所が写されたほかの写真との照合
- ④において文字情報を確定的に裏付けるものは一切得られなかったにもかかわらず、仮定のまま⑤に進むことよって⑥⑦にたどり着くことができ、最終的な撮影場所の確認が得られた。④で文字情報が得られな

いケースにおいても、被写体情報を調査者が過去に見た写真の不確かな記憶に結び付けたり〈勘〉による推定によつて⑤以下へとつないでゆくことがほとんどであるため、このステップをどう乗り越えるかが撮影場所同定の大きなポイントとなる。

この経験に基づく推定やそれを確認するための⑦のほかの写真のインデックスも調査者の頭の中にあるのみであった。また実際には③⑦がランダムに反復され、最終的に何が決め手となったのかよくわからない例も多い。

五丁目のケースでは、焼け跡の遠景に写る建物が場所同定の決め手になった。ここで参照された建物は、都市の中での誰もが知るようなランドスケープ的な建物ではない。したがって階数や高さ、形状的な特徴、細部の特徴などに基づいて、建物を特定し、そこから位置関係を割り出していくことになった。本稿で試みた映像のパノラマ化、建物リストの作成はこうした同定作業の基礎的なデータである

## 七 写真から読む焼け跡の都市空間

ここまでの作業結果のうち、写真から読み取ることができた一丁目から六丁目までの街並みの滅失範囲、そのまま残存したと思われる範囲を、また建物疎開区域図で表記された範囲を示し、存在建物も表した〔図8〕。二章で示したように、空襲を受け始めた期間と建物疎開が行われていた時期は重なっており、写真から街並みが滅失していることがわかった場合でも、その要因が空襲によるものなのか、疎開によるものなのかという二つのケースが考えられることになる。



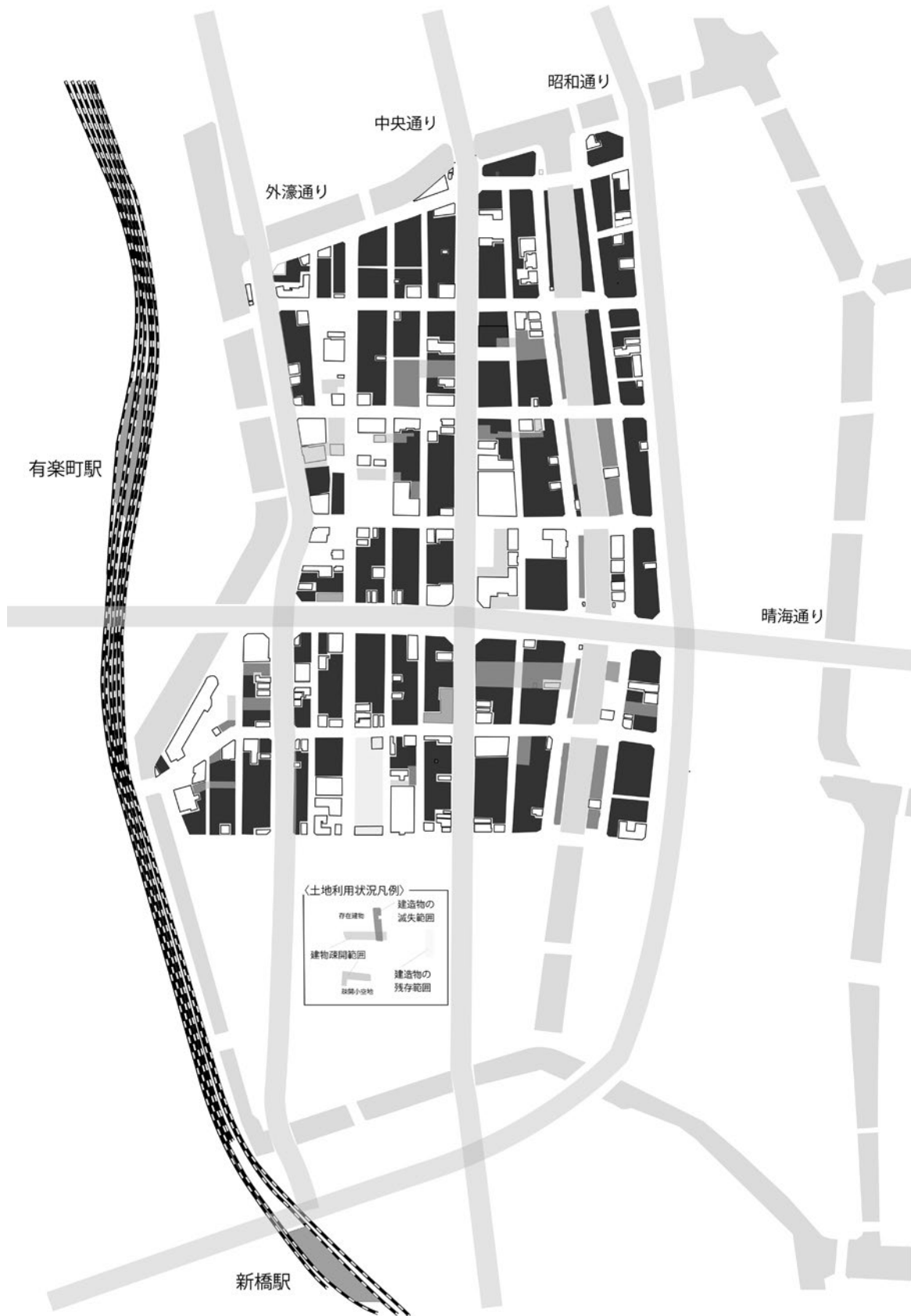


図8 銀座1～6丁目における街並みの滅失範囲と存在建物  
主要対象範囲(1丁目～6丁目)を中心に写真から確認できた範囲のみを示しているので、今回の写真から確認できていない範囲は空白のままとしている。

写真の撮影時期にもよるが、前者の場合、片付けをする前は焼失した瓦礫が無秩序に散らばっていることになり、後者の場合は比較的整頓された状況になっていることが考えられる。例えば七丁目や八丁目の写真の場合（参考画像5、写真14）、滅失した構造物の部材の再利用と思われる煉瓦やトタン板状のものが積まれていたりして、五丁目の角（写真42・43、参考画像3）のように瓦礫が散乱しているような焼け跡の地表面とは違っている。

このように複数の写真による比較や地図情報との対照で、写真に写された地表面の差異は認識しやすくなる。

焼け跡の瓦礫の処理作業についても、日本側のプレス写真等で紹介されているイメージは多少の演出と誇張が感じられるのだが、テッド・ギリアンの写真（写真30・32・47）は、その作業の工程を観察するように比較的淡々と撮っており、そこに演出的な意図が介入しているようには感じられない。実際の状況に近いイメージが記録されていると考えて良さそうである。

多くの写真が撮られている場所では、時間が進むに連れて、片付けが進み、地表面の状況が変化していくことがわかる。特に五丁目の角は、精度高く焼け跡の状況を復元することも可能ではないかと思われる。

資材や瓦礫が運ばれた先についての断片的な情報も写真から読み取ることができる。五丁目三十間堀の河岸に瓦礫を積み上げる作業をしている写真32、昭和通りの緑地帯であった部分に資材が積み上げられている様子が写された写真37である。

比較的片付けが進んでいる空地には、動かしたり破壊することができなかつたものが置かれた状況が記録されている。それは防火用水枡や金

庫、工業用（あるいは印刷用）の機械器具、煙突などである。街並みが滅失した後に残されたこれらのものは、今回扱った銀座の写真に限らず、占領初期の写真に多く現れるモチーフである。

防火用水枡は各敷地と道路との境界部分に置かれたままになっており（写真50）、そのこともあってその後も比較的長く都市風景の中に確認できたものの一つである。焼け野原であっても、防火用水枡の背後には生活空間があったことを想像させる。金庫があった場所は前章の例のごとく、金庫に書かれた文字から写真の場所がわかることもあるように（写真22）、多くの場合、会社や事業所があった場所であろう。工業用の機械器具は、米軍の空襲に際しての東京の市街地への認識、すなわち街中が軍需工場になっているという認識を裏付けるようなものとして、視線が向けられているのかもしれない<sup>50</sup>。しかしながら銀座にはそうした類の工場はなく、大きな機械があるとすればおそらく印刷機械であろう（写真51）。大きな風呂屋の煙突は、特にそののみを撮ろうとしている写真は少ないが、引きの写真の場合には必ずと言っていいほど映り込んでいるもので、街の風景の中にあつた小さなランドマークの残骸でもある。

五丁目の角に残されている長い鉄骨はいくつかの写真（写真27など）に出現する。焼け跡の上に揃えて置かれている状況などを観察する限り、おそらく一月の空襲で被災した地下鉄銀座駅の構造体として使われていた鉄骨が、このすぐ横にあつた地下鉄出口から運び出されて置かれていたものと想像される。

焼け落ちた建物のうち、焼け残った防火壁や構造が写されている写真がある（写真34・35・52・53・参考画像6）。壁だけになった空間の中で行われている活動、柱だけに囲まれた空間の中での活動にも焦点が当てられ

ている。さらには敷地境界にあった防火材で作られている塀も一部の写真（参考画像1）からは確認できるが、その場所は主に銀座の東側の木挽町方面である。銀座の中心部は、建物の多くが都市型建築であつて、敷地境界の塀がほぼ存在していないという都市空間形態に起因していると言えるだろう。

これらのものは防火用水枘を除けば、復興とともに街の中からほぼ姿を消していったもので、翌年になると写真のモチーフとしてはほぼ現れなくなるようである。

焼け跡や疎開空地の暫定的な利用がわかるものとしては、壕舎と思われるものが映り込んでいる写真（写真54）、菜園の写真（写真55）が印象的である。前者は五丁目の晴海通り沿い、地上に三角型の屋根が置かれ、その下には半地下または地下形式の壕舎があつたものと見られるが、元々あつた地下部分を活用していた可能性もある。後者は四丁目の昭和通りに沿つたブロックにあつたものである。柴田の手記には二丁目米田屋ビル横にもさつま芋畑があつたことが記されているが、今回の調査からはその写真は見つかつていない。

そうした空地での人々の活動に着目してみると、同じく七丁目の疎開空地では、散在する資材を拾う姿を捉えたもの、構築物を解体した際に出たと思われる「売り物」のレンガを捌いているもの（参考画像5）、五丁目の空地で空襲の瓦礫をショベルで片付けているもの（写真47）、四丁目の空地でラッキーストライクの空き箱を傍において、地表面の何かを拾おうとしているもの（写真56）、同じ空地で焚き火をしているもの（写真57）、五丁目の空地で演説をしているところを米兵に声をかけられてい

るもの（写真58）、五丁目の空地で瓦礫の処理をしているもの（写真47）、自転車が停められている一丁目の空地に座つて休憩をしているような職人が写されたもの（写真59）、一丁目の空地で瓦礫の処理をしている少年二人が手を休めカメラに向いているもの（写真24）などである。とりわけテッド・ギリアンの写真には人々の活動を観察的に捉えようとしている写真が多く、読み取りうる情報は多い。

バラック建築を正面から撮っている写真も少ないが存在する。写真60はテッド・ギリアンの写真なので、一九四五年暮れの撮影である。一丁目の京橋川河岸の写真は、構成している部材の細部も確認できそうなものである。あるいはムービーに写された六丁目のバラック（参考画像2）も三十間堀沿いと思われる。

中央通り四丁目や晴海通り五丁目に作られる共同建築の建設が始まつて建物の骨組みが写されている写真（写真61）も過渡的な景観が理解できるものである。

柴田の手記によれば中央通りの露店は九月早々に出ているが、同時期の状況を捉えているいくつかの写真がある。特徴的なのは、路上にそのまま売り物を広げていることで、これが戦後すぐの露店の販売形態だったと理解できる（写真62）。また露店の向きは、後に車道際の歩道に、車道を背にして出されるようになるが、一九四五年秋冬の段階では、それは逆向き、すなわちかつて店のあつた敷地側を背にした向きになっている（参考画像7）。

写真から確認できた範囲では、一九四五年秋冬の時点では、中央通りの二丁目東側、五丁目東側、六丁目西側、八丁目西側、数寄屋橋橋詰など





写真51



写真50

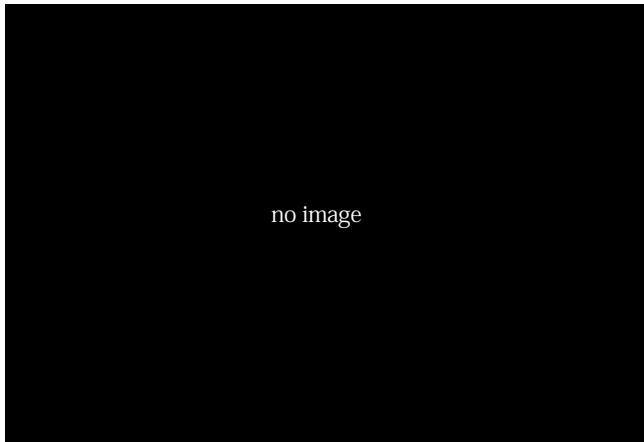


写真53

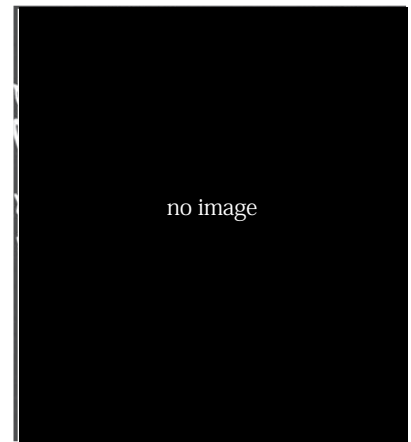


写真52

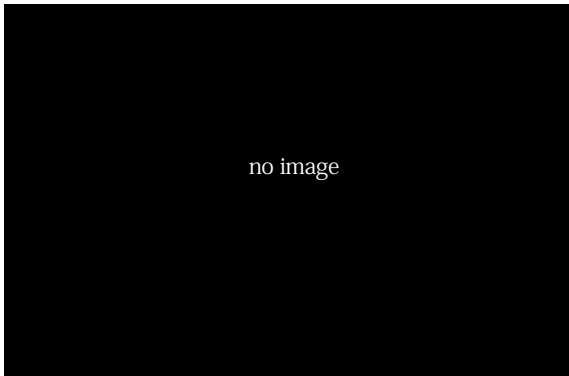


写真55



写真54

- 写真55 銀座4丁目昭和通り沿いの耕作地 原シリーズ名"Tokyo And Nagasaki" 1945年 Photo by Alfred Eisenstaedt/The LIFE Picture Collection/Getty Images  
<https://artsandculture.google.com/asset/tokyo-and-nagasaki/owHFuNt7Aq-6SQ>
- 写真56 銀座4丁目の空地 地面を見て何かを探しているように見える 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンゼルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館
- 写真57 銀座4丁目の空地 焼き火をしているのが見える 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンゼルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館
- 写真58 銀座5丁目、鳩居堂の南側の空地で演説をしている人と米兵が会話をしているように見える 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンゼルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館
- 写真59 銀座1丁目の空地 休憩中の工事関係者のように見える 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンゼルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館
- 写真60 銀座1丁目、京橋川河岸のバラック建築 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンゼルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館
- 写真61 中央通り銀座3、4丁目あたりを走る戦車 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンゼルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館



写真57



写真56



写真59



写真58



写真61



写真60

参考画像5 銀座7丁目の建物疎開空地

原シリーズ名"Tokyo And Nagasaki" 1945年Alfred Eisenstaedt撮影

<https://artsandculture.google.com/asset/tokyo-and-nagasaki/eQFRebHYtyjqg?hl=ja>



写真50 銀座4丁目を北方向に 街路に沿って防火用水枡が並んでいる 1945年10月6日米海軍撮影  
米国国立公文書館所蔵 (80G-box1438-374452)

写真51 銀座2丁目の空地に置かれている機械類 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンジェルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館

参考画像6 銀座1丁目の焼け跡の露店 (サイト上の写真は裏焼き状態で、左右逆の画像である)

原シリーズ名"Tokyo Essay" 1945年10月George Silk撮影

[https://artsandculture.google.com/asset/tokyo-essay/cgHWH9R4a\\_-cg?hl=ja](https://artsandculture.google.com/asset/tokyo-essay/cgHWH9R4a_-cg?hl=ja)



写真52 銀座5丁目の焼け跡に立って路上の露店をみる 奥に小野ピアノが見える 1945年11月菊池俊吉撮影

写真53 銀座3丁目から京橋方面をみる 1945年11月菊池俊吉撮影

写真54 瓦礫の処理か地面の片付けをしている人々とシャベルを手にして撮影者を見つける男女 その背後にあるのは壕舎の入り口とみられる 1945年10月6日米海軍撮影 米国国立公文書館所蔵 (80G-box1438-374460)

に露店が出されていたことがわかる。テッド・ギリアンの写真には、六丁目西側の中央通りの被災建物の仮囲いの掲示されたポスターを見入る人々の姿も写されており(写真63)、ストリートでの活動が取り戻されてきた初期の形を見ることが出来る。

以上、これまでの作業を通じて得られた情報を集約した図を示す(図9)。すでに示してある通り、建物疎開区域、焼失区域、非焼失区域を面的に示し、写真の撮影地点をプロットしたもので、銀座の都市空間の詳細を知ろうとする際にはインデクスの使うことができる。詳細な街角などの写真をこうした図に重ね合わせて見せることによって、より立体的・連続的な理解が可能になるだろう。

そうした重ね合わせという手法については、本稿でも繰り返し示してきた「広い画」を下敷きに、同じ部分を撮影した詳細な写真を重ね合わせて見せることもできる(図10・11)。こうした方法で見せることにより、広い空間と部分詳細という複眼的に都市空間をイメージできるものとなるだろう

## 八 今後の課題

### (一) 撮影地点の同定作業を進めること

場所の同定がなされていない写真は、筆者らが調査収集した写真にもまだ多く含まれる。もちろん米国所在の写真にはまだ多く含まれていることは確実である。それらの場所の同定は継続的な課題である。当時を知る人が減っていることから「解読」できる人が減って、一般的には難



写真63

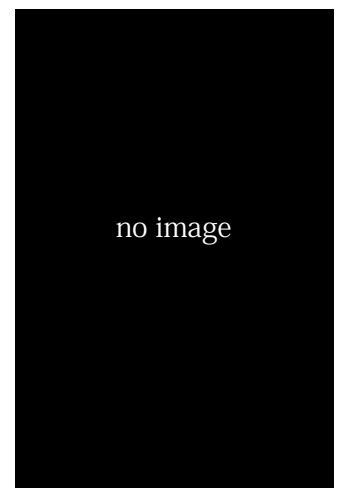


写真62

写真62 数寄屋橋橋詰でみかん(?)を売る露店 路面に品物が置かれている 原シリーズ名"Tokyo And Nagasaki" 1945年  
Photo by Alfred Eisenstaedt/The LIFE Picture Collection/Getty Images  
<https://artsandculture.google.com/asset/tokyo-and-nagasaki/eQGDdzy54wKKPw?hl=ja>

参考画像7 銀座1丁目の空地での露店 このカットは裏焼きの状態でweb上にアップされている  
原シリーズ名"Tokyo Essay" 1945年10月George Silk撮影  
<https://artsandculture.google.com/asset/tokyo-essay/TgFJEbZr84Xhhw?hl=ja>



写真63 銀座6丁目路上に張り出されたポスターに人々が集まっている 1945年12月テッド・ギリアン撮影 Ted Gilien Photographs of postwar Japan and the Philippines カリフォルニア大学ロスアンジェルス校チャールズ・E・ヤング リサーチ図書館



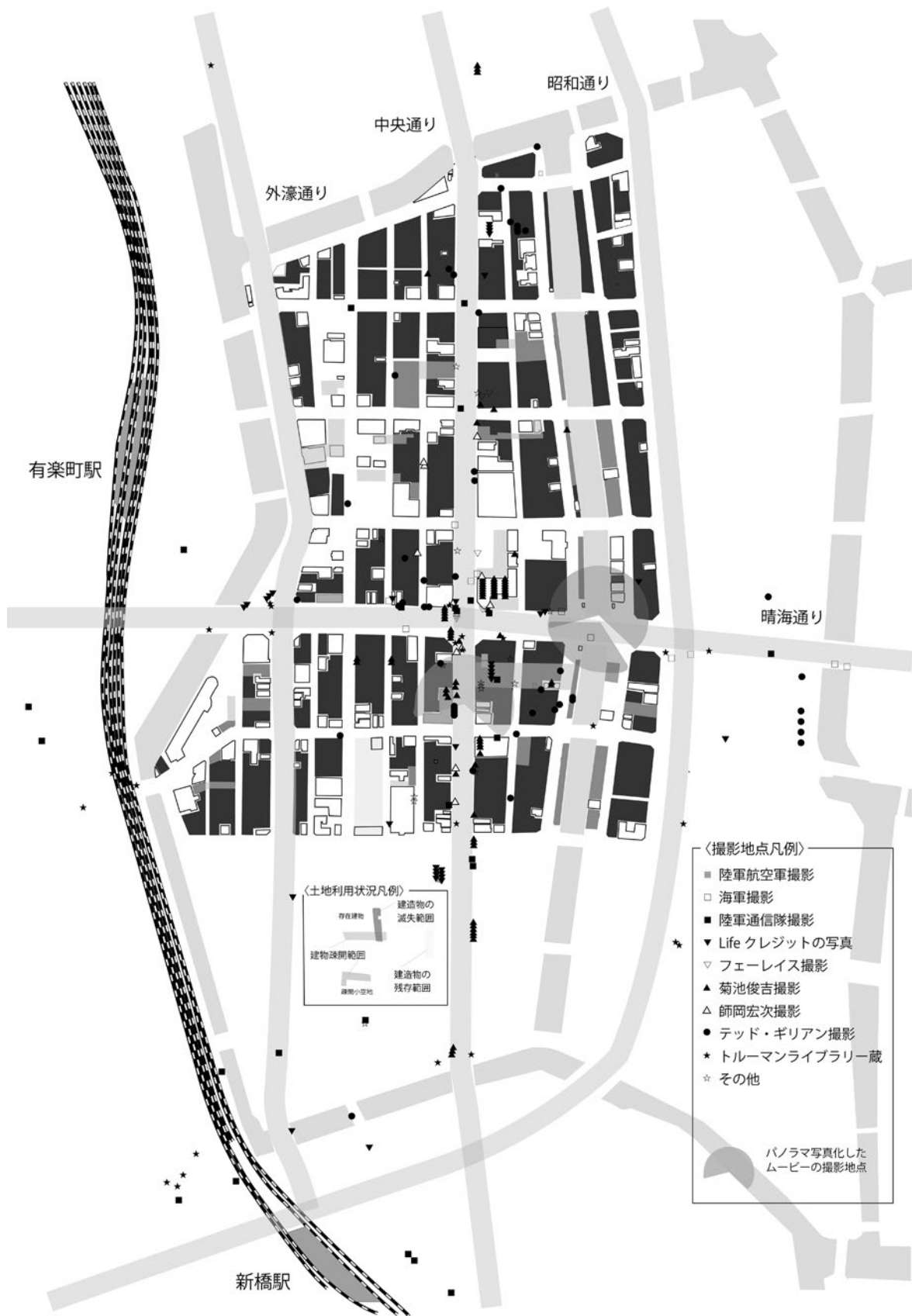


図9 滅失範囲と残存建物

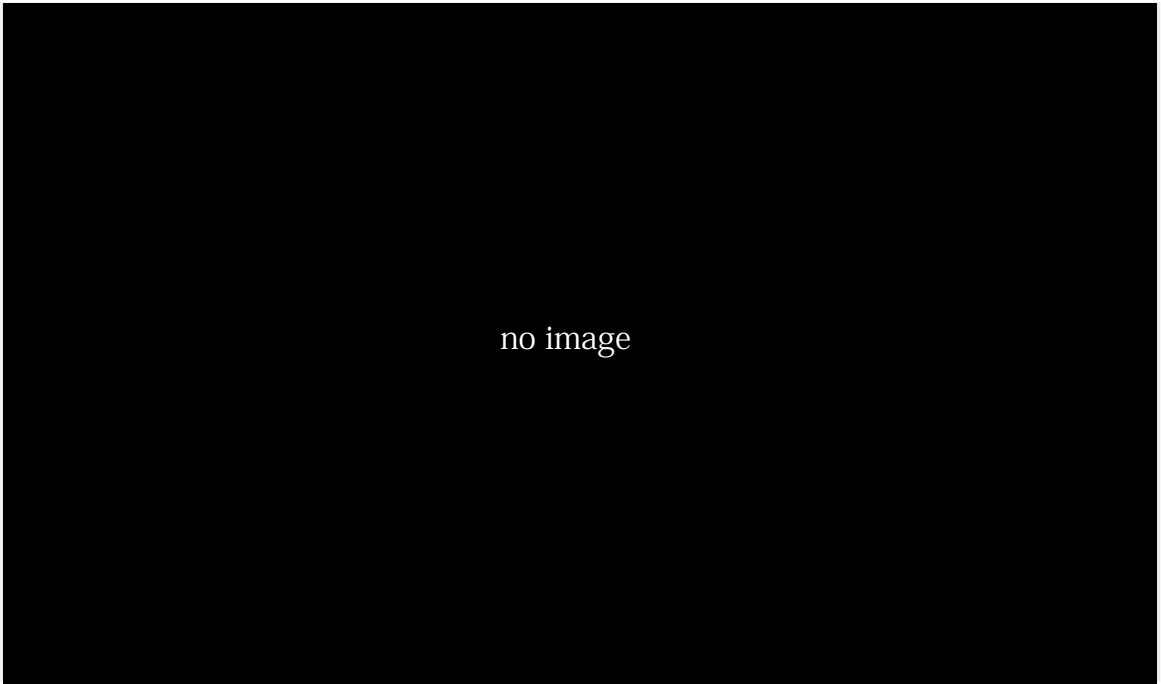


図10 写真8をベースにフレーム内の事物を捉えた写真を配置する

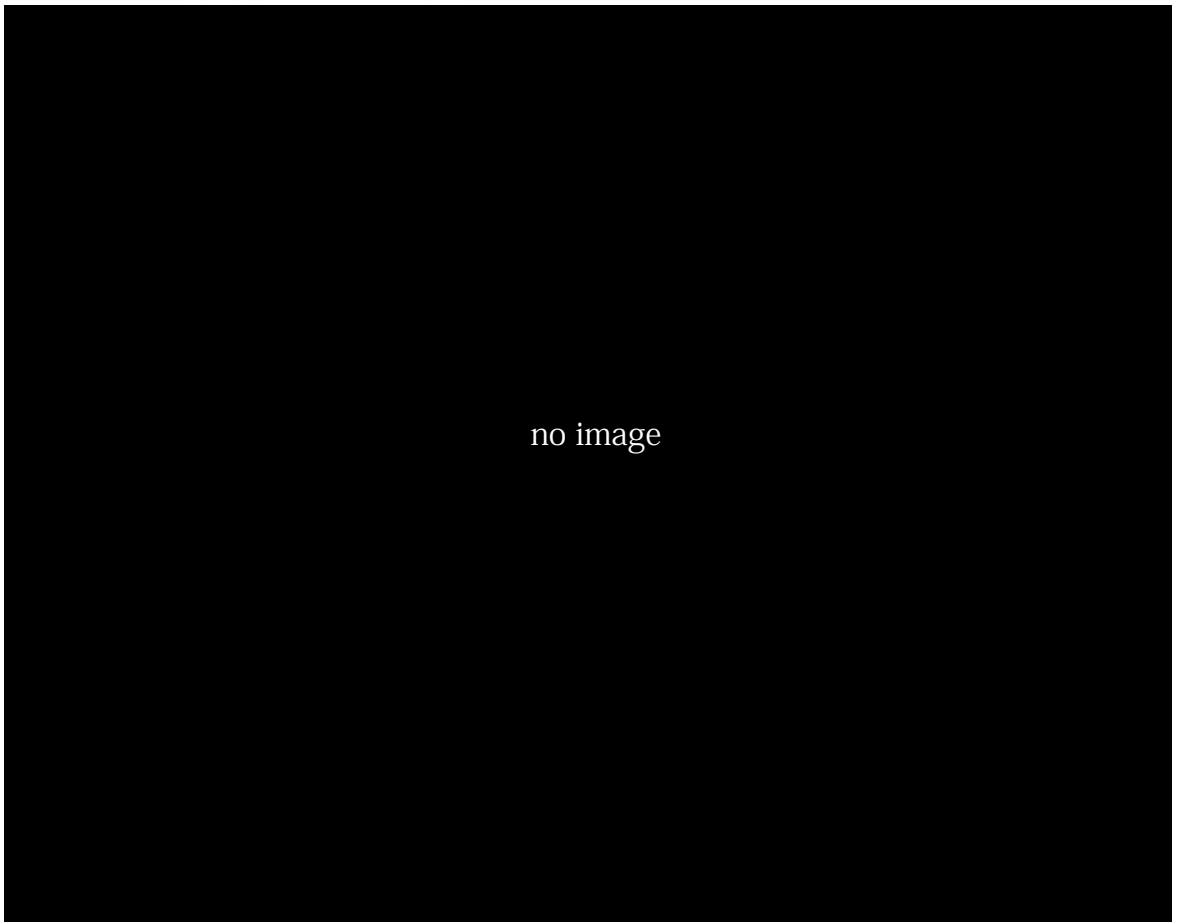


図11 写真10-11をベースに銀座5丁目の空地の写真を配置する

易度が上がっていく。本稿で示した通り、複合的な利用によりある程度読み取りが可能であり、引き続き同定作業を蓄積していく必要がある。

## (二) 初期の撮影

五丁目の写真で示した通り、八月三〇日から九月二日というごく初期の東京の写真群はとりわけ貴重なものと思われるが、今回の調査で複数のカメラが入っており、集団で移動していたことが明らかになった。銀座のほか、浅草、芝、赤坂などを訪れている。アメリカ側の最初の目撃者であり、彼らがどこをどう動き、どのような撮影を進め、さらにそれが米本国へどのように伝えられたのか、その全容を解明していくことも課題である。

## (三) 蓄積と共有・利用の促進

東京に限らず、全国各地で同様の焼け跡の写真が存在しうる。今回知見を得た同定の手法をさらに進化させることと、その手法を共有し、裾野を広げることも課題である。さらにそのための前提としては、様々なソースの写真を複合的に利用できる場をオンライン上、オフライン上問わず、作っていくことである。垣根を越えて資源を共有し、複合的な利用をどのように促進していくのがアーカイブ運営上の課題である。

## 注

(1) この節の記述は、佐藤洋一「写真の里帰り…米国所在の戦後日本の写真を地域

へ還元するプロセスとその課題」(デジタルアーカイブ学会第四回研究大会、

二〇二〇) から引用している。

(2) 管見では米軍オフィシャル写真のリサーチによる写真集は、以下が嚆矢である。

佐久田繁編著『東京占領』月刊沖繩社、一九七九。東京空襲を記録する会編『東京空襲の記録』三省堂、一九八一。

(3) 以下ではオフィシャル写真の一端を明らかにしている。佐藤洋一「極東軍司令部文書からみたオフィシャル写真の形成—一九五二—五二年を対象として—」『インテリジェンス』vol.20、二〇二〇、八六—一〇〇頁。

(4) 筆者の以下の二冊も米国立公文書館所蔵の写真のみで構成している。佐藤洋一『図説占領下の東京』河出書房新社、二〇〇六。同『米軍が見た東京1945秋』洋泉社、二〇一五。

(5) 以下は最も早い時期の一冊である。『マッカーサーの見た焼け跡—フェーレイス・カラー写真集』文藝春秋、一九八三。

(6) 図1に示す通り、多数の個人コレクションの収集を継続的に行っているのは昭和館のみであろう。

(7) 『LIFE』誌のフォトアーカイブはGoogleによって提供されている。http://images.google.com/hosted/life

(8) 例えば米議会図書館プリント室には、一九六六年に廃刊になったNew York World-Telegram & Sun Newspaper Photograph Collectionが、南カリフォルニア大学東アジア図書館には一九六一年に合併で廃刊となったLos Angeles Examiners Photographs Collectionが所蔵されている。

(9) 日本空襲デジタルアーカイブ(二〇二〇年一月三十日閲覧) https://www.japanairraids.org/

(10) 北沢川文化遺産保存の会 Facebookページ(二〇二〇年十一月十八日閲覧) https://www.facebook.com/189215821169702/

(11) 石巻アーカイブ(二〇二〇年十一月十八日閲覧) https://ishinomaki-archives.com/

(12) 同会の活動については佐藤「インディペンデントで自発的な調査体…鳥類学者



- オリヴァー・L・オースティンコレクションの写真調査」(デジタルアーカイブ学会誌、四巻四号、二〇二〇)参照。
- (13) 例えば初期の労作とも言える佐久田繁編著『東京占領』、同『日本大空襲 TARGET TOKYO (太平洋戦争写真史)』(ともに月刊沖繩社、一九七九)はアーカイブ写真が大量に掲載されているが、出典に関する情報が大変シンプルである。ごく近年の写真集である平塚柁緒『写真でわかる事典 日本占領史』PHPエディタース・グループ、二〇一九。あるいは庭田杏珠・渡邊英徳『AIとカラー化した写真でよみがえる戦前・戦争』光文社、二〇二〇などと同じようなスタイルの出典表記である。
- (14) オフィシャル写真のヴァナキュラー化については、前掲注3佐藤(二〇二〇)八六〜一〇〇頁を参照。
- (15) 前掲注13、庭田・渡邊(二〇二〇)
- (16) 朝日新聞一九四四年八月九日二面
- (17) 朝日新聞一九四五年三月二十一日二面
- (18) 「京橋区全図―京橋区建物疎開地区図 昭和十九年五月」中央区立京橋図書館蔵
- (19) 柴田和子『銀座の米田屋洋服店：時代と共に歩んだ百年』MBC21、一九九二
- (20) 同書、四四六頁
- (21) 朝日新聞一九四五年八月十六日二面
- (22) 朝日新聞一九四五年八月十九日二面
- (23) 朝日新聞一九四四年七月十九日三面
- (24) 朝日新聞一九四五年三月三十日二面
- (25) 朝日新聞一九四五年五月二日二面
- (26) 朝日新聞一九四四年十一月五日二面
- (27) 朝日新聞一九四五年三月二十六日二面
- (28) 前掲注19柴田(一九九二)、四七四頁

- (29) 朝日新聞一九四五年四月二十六日二面
- (30) 朝日新聞一九四五年五月二十八日二面(「法規に拘泥しない どしどし建てよう、仮住宅を 配給は地下隣組単位に／友末防衛局長一問一答」)
- (31) 朝日新聞一九四六年四月二十日二面
- (32) 以下の空襲に関する記述は平和博物館を創る会編『銀座と戦争』平和のアトリエ、一九九三、および早乙女勝元監修、東京大空襲・戦災資料センター編『決定版 東京空襲写真集 アメリカ軍の無差別爆撃による被害記録』勉誠出版、二〇一五による。
- (33) 朝日新聞一九六三年三月二十三日夕刊七面「銀座のドまん中から爆弾 戦争の忘れもの 地下鉄の工事現場」
- (34) 前掲注19柴田(一九九二)、四四一頁
- (35) 同書、四六七〜四六九頁
- (36) 同書、四六九頁
- (37) 朝日新聞一九四五年十月十八日一面「伊東屋、ダンスホールに」
- (38) 朝日新聞一九四五年十月十七日二面「帝都復興への第一歩」
- (39) 『東京一九四五年・秋』文化社、一九四六
- (40) 井上祐子ほか『戦中・戦後の記録写真：「東方社コレクション」の全貌』政治経済研究所付属東京大空襲・戦災資料センター戦争災害研究室、二〇一四、井上祐子ほか『戦中・戦後の記録写真II：林重男・菊池俊吉・別所弥八郎所蔵ネガの整理と考察』政治経済研究所付属東京大空襲・戦災資料センター戦争災害研究室、二〇一七、三
- (41) 山辺昌彦、井上祐子編『東京復興写真集：一九四五〜四六』文化社がみた焼跡からの再起』勉誠出版、二〇一六
- (42) 佐藤「古写真の空間的視点：撮影位置同定について」GIS day in 関西、二〇一九 [https://researchmap.jp/read0206467/presentations/24600911/attachment\\_file.pdf](https://researchmap.jp/read0206467/presentations/24600911/attachment_file.pdf)

- (43) 使用したソフトはマイクロソフト社のImage Composite Editorである。
- (44) 一九五〇年代前半の火災保険特殊地図の原版は都市整図社が所有しているが、銀座が含まれる地図は以下の二つの書籍に所収されている。『中央区沿革図集 京橋篇』中央区京橋図書館、一九九五、佐藤『あの日の銀座―昭和25年から30年代の思い出と出会う』武揚堂、二〇〇七。後者は原版の複数の図幅を連結させて銀座全体を大きな地図として収録しており、本稿で作成した地図のベースマップとして使用した
- (45) 同コレクションのFinding Aidは以下のページ参照。https://oac.cdlib.org/findaid/ark:/13030/c82f7p0j/entire\_text/ 一二のフォルダは以下のような構成になっている。①長崎壊滅、②浦上天主堂破壊、③飛行機と船、④街路の光景、⑤瓦礫の除去、⑥男性と群衆、⑦子供たち、⑧女の子、⑨歌舞伎、⑩東京の皇居、⑪米軍のGI、⑫フィリピン。
- (46) Adobe PhotoshopのPhotomergeの機能を使っている。
- (47) 『東京中央電話局電話番号簿(昭和十七年十月一日現在)』東京中央電話局、一九四三、二八七頁
- (48) 『官報 第二〇四八号(大正八年六月三日)』
- (49) 『ぼくの近代建築コレクション スエヒロ銀座店／銀座6丁目』https://blog.goo.ne.jp/ryuw-1/e/dcd705fbcd34ea9431d91665ef445bd0
- (50) 一九四七年九月八日米軍撮影の航空写真。国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス USA-M449-109 https://maps.gsi.go.jp/contents/ImageDisplay.do?specificationId=1179169&isDetail=true
- (51) 前掲注44の火保図より。
- (52) 大規模な軍需工場への空襲を経たあと後でも、街の中にある家内工場(Home Factories)が軍需品を調達し続けていると信じられていた
- (53) 前掲注19柴田(一九九二)、四七四頁

#### 謝辞

建物疎開の項に関して石榑督和氏のご教示を得ましたので、記して感謝の意を表します。本稿はJSPS科研費JP18K11939の助成を受けた研究による成果です。

#### 著者プロフィール

佐藤洋一(ちやう・よういち)一九六六年(昭和四十二)東京都生まれ。早稲田大学大学院修士。博士(工学)。  
現在、早稲田大学社会科学総合学院教授。  
主要著作に『図説・占領下の東京』(河出書房新社、二〇〇六)、『米軍が見た東京1945秋』(洋泉社、二〇一五)。

衣川太一(きぬがわ・たいち)一九七〇年(昭和四十五)大阪府生まれ。日本大学芸術学部映画学科卒業。

現在、NPO法人プラネット映画保存ネットワーク客員研究員。

